

Nr. 47・48 号合併号

DER KEIM

野村滋先生・在間進先生・谷川道子先生追悼記念号

東京外国語大学大学院
ドイツ語学文学研究会

目次

野村法先生追悼

吉原 高志 Takashi YOSHIHARA …………… 1

在間進先生を偲んで

Dem Andenken Prof. Susumu Zaimas

藤縄 康弘 Yasuhiro FUJINAWA …………… 7

谷川道子先生との思い出文—その言葉と声から

Remembering Prof. Michiko Tanigawa: Her Words and Voices

小松原 由理 Yuri KOMATSUBARA …… 11

<論文>

ローベルト・ヴァルザーの絵画認識と再創造

絵画テキストにおける知覚と記憶について

Zwischen Lesen und Nacherzählen:

Über die Wahrnehmung und die Erinnerung in Robert Walsers Texten zur Malerei

木村 千恵 Chie KIMURA …………… 17

<研究ノート>

ゲーテの『ファウスト』における durch- 動詞

分離・非分離に律動が与える影響について

Die *durch*-Verben bei Goethes „Faust“

Über den rhythmischen Einfluss auf die (Un)trennbarkeit

佐藤 宙洋 Takahiro SATO …………… 39

研究会便り …………… 73

会則 …………… 75

バックナンバー一覧 …………… 78

執筆者・査読担当者／原稿募集 …………… 84

編集後記 …………… 85

野村泫先生追悼

吉原 高志

関東学院大学名誉教授

Takashi YOSHIHARA

Kanto Gakuin University, Professor Emeritus

野村泫先生が佐々梨代子さんとの共編共訳で『子どもに語るグリムの昔話』を出されていたこぐま社の編集の方から、先生が、3月23日にご逝去されたとの電話をいただきました。わたくしは、うちの妻ともども先生のもとで学び、先生から大学時代、そして卒業してからも絶えることなくご指導いただいたこともあり、電話をいただいた後、ふたりともただ呆然とするのみでした。

「KEIM」の編集の方から野村先生の追悼文をとのご依頼があったものの、思い出すことがあまりにも多くの個人的な思い出や、学恩も書き尽くせぬほどで、何から書いてよいのか、頭の中がまとまらずにいました。

大学で野村先生のご指導をいただいてからの、先生の研究と、また私のかかわりを書くことで、わたしの心もすこしは落ちつくかのように思われます。

大学のドイツ文学の授業では、先生はドイツ語のテキストのコピーを配り、ドイツ児童文学史の講義をされていました。中世の子どもの本から始まり、グリムの昔話集、そしてウルズラ・ヴェルフェルの『灰色の畑と緑の畑』、ミヒヤエル・エンデの『モモ』などまだ日本語訳の出していないドイツの最新の子どもの本におよぶものでした。1970年前後の作品にいち早く触れられたことは、ほんとうに得難い経験でした。1968年以降、ドイツの子どもの本分野では「反権威主義的児童文学」と呼ばれる作品が数多く出版されていましたが、そう言った作品はまずは野村先生の講義の中で知ることになりました。日本の児童文学界でも、こういった子どもの本は、野村先生が誰よりも先駆けて紹介されました。授業でも取り上げられたウルズラ・ヴェルフェルの『灰色の畑と緑の畑』が岩波書店から先生の訳で出版されましたが、日本の児童文学の評論家たちからは、かならずしもこころよく受けいれられなかったように記憶しています。作品の内容などから、子どもの本にふさわしくない、というような評価もありました。先生は、その後



もヴィリ・フェアマンの『隣の家の出来事』や、ライナー・クンツェの『あるような ないようなはなし』など、積極的に翻訳、紹介を続けられました。わたしたちはその作品の面白さはもとより、作品の選択基準の厳しさ、そして訳文の日本語の的確さ、美しさに、いつも教えられるところがありました。ウルズラ・ヴェルフェルの『灰色の畑と緑の畑』のついては、岩波少年文庫創刊40周年記念の特集、『図書』(1990)誌上で、各界の人々にアンケートを取った中で、谷川俊太郎氏が先生の訳文について「ほとんど散文詩のようだ」と高く評価されました。

先生の研究の柱であったのはもちろんグリム研究でしたので、グリム童話演習の講義もなさっていました。この演習では、グリムの話をひとつ取り上げ、『グリム童話集』の各版の比較、原文と日本語訳の比較検討、世界各国との類話の比較、リューティの文体論に基づいた文体的な考察、ベテルハイムやユンクなどの心理学的な考察、プロップの構造的な把握、ヨレスの精神の志向性と他の民間伝承文芸のジャンルの特質などをテーマに、学生による発表と、それに対する先生のコメントという形でした。

先生は、講義とは別に、関心のある学生や卒業生また他大学の学生などに声をかけて、新しいドイツの子どもの本の研究会、そしてグリム研究会を開かれ、この両研究会は先生が東京外国語大学を退官された後も長く続けられました。この研究会からは、多くのグリム研究者やドイツの子どもの本に関わる人材が育ちました。

わたくしは卒業論文「ドイツの伝承童謡」のために、一年卒業をのばし、ドイツの国際児童図書館で資料集めをしましたが、その際にも先生からはいろいろ助言をいただきました。さらに修士論文は「伝承童謡の文法」というテーマで、伝承童謡の構造分析でしたが、もちろん、大学での先生のグリム童話の構造分析に触発されたものです。

わたくしが大学院生であったときに、先生は、大学院生たちが論文を発表する場が少ないことを心配されて、論文集を出すことを提案され、それは「DER KEIM」として、年一回発行されることになります。先生は、第一号のまえがきに、「DER KEIM」にかける思いを次のように書かれています。

ドイツ語学科が大学院修士課程の修了者を送り出してから今年でちょうど10年になりますが、その間大学院生には研究を発表する場がありませんでした。大学当局には大学院生の論文集を出す企てがなかったわけではないのですが、未だに実現していませんし、今後も実現する見込みはほとんどありません。とすると、

各学科が自力でやるよりほかないわけです。

「自力でやるほかないわけです」という言葉に先生の強い思いが読み取れます。そして論文を執筆する院生たちには、期待とともに、戒めも次のように書いています。

大学院の修士課程に在学したり、それを終えたばかりの人々が書くものに、どれほど学問的な高さを期待できるか、という声もありますが、しかし書くことによって初めて問題がはっきりと意識にのぼり、自己の力量を知れるという面もあります。とにかく、思考は書くことによっていっそう正確になり、熟していくことはまちがいありません。

先生は、「DER KEIM」という論文集の誌名にちなんで、Keim（萌芽）が、「皆無」とならないように、先生らしい励ましも付け加えています。わたしたち多くの修了生たちは、この論文集に論文を掲載することで、その後のキャリアを切り開くことができました。

わたくしはその第一号に卒論に手を加えた「ドイツの伝承童謡」を載せてもらいました。修論の「伝承童謡の文法 平行性について」が、先生の退官記念論文集『Spuren』に先生の論文の次に掲載されたことはいまでもうれしく思い出します。

先生は、生来の怠け者のわたくしのために、機会があるごとに声をかけてくださいました。ほるぷ出版のベルリンコレクション（ドイツの古典的な絵本の復刻）の編集と解説の仕事もそのひとつです。先生とドイツ国立図書館のヴェーゲ・ハオプト館長が中心のお仕事でした。ミュンヘン一枚絵、バルトゥフの『子どものための絵本』（1790）、ホフマン『もじゃもじゃペーター』（1847）、ブッシュ『マックスとモーリッツ』（1870）、クライドルフ『花のメルヘン』（1900）やホーゼマンの絵本など、ドイツの古典的な絵本の研究には欠かすことができない作品の原書を手に取りながら、先生を中心に、他に数名の者も含め議論したことも、かけがえのない経験で、ドイツの子どもの本、特に18～20世紀の絵本に対する世界を拓けてくれました。

先生が訳されたベッティーナ・ヒューリマンの『ヨーロッパの子どもの本』の文庫化の際には、解説を書くように推薦くださいました。解説を書くために、この本をじっくりと再読することで、わたくしの子どもの本の世界が、ドイツからドイツを含む欧米へと広がりました。

またそのころ夫婦で共訳した『初版グリム童話集』もすべて先生とのつながりの中で実現したものです。

先生の『ドイツの子どもの本 大人の本とのつながり』(2009)は、大人の本を含めたドイツ文学史の流れの中で、1980年前半までのドイツの子どもの本が取り上げています。子どもの本を、大人の本とは別枠で語ることがままありますが、子どもの本も「文学」であることには変わらない、という先生のお考えが、この本を通じての一貫した姿勢でした。『ドイツの子どもの本』の増補版を出すに当たり、1980年代以降の子どもの本も取り上げようと、先生は、出版社にわたくしを推薦してくださいました。そのころ、わたくしは在任していた大学での在外研究で、客員研究員としてミュンヘンの国際児童図書館に籍を置いておりました。国際児童図書館という利点を生かしながら、これまで知らなかった80年以降の多くの子どもの本や資料を読む機会にめぐまれました。ゆっくりとミュンヘンの生活を楽しもうという気持ちでいたわたくしでしたが、集中的に作品を読み込むという作業のなかで、80年代以降のドイツの子どもの本の大きな流れをつかむことができました。先生がそのような仕事にわたくしを推薦してくださいしたのは、今となると、ドイツで毎日ビールやワインを飲んで怠けるだろうわたくしを叱咤するためであったと思います。

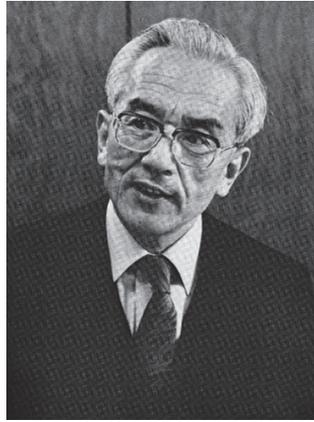
東京子ども図書館の「こどもとしょかん」(2020 秋 167)にわたくしは、「アンチ・メルヘンとドイツの子どもの本—昔話から見ると」という論考を書きました。先生に導かれるようにこれまで仕事を続け、定年を前にしたわたくしにとって、まとめのような仕事でした。この拙稿を読まれた先生から、お葉書をいただきました。わたくしがいただいた先生の最後の直筆の葉書です。次のような文面でした。

ところで、「こどもとしょかん」167号の「アンチ・メルヘンとドイツの子どもの本—昔話から見ると」を拝見させていただきました。よく書けていますね。このテーマに関しては、高志さんの右に出る者はいないでしょう。

ドイツの伝承童謡という非常に狭い場から、ドイツの古典的な絵本の世界、グリムの昔話、中世からのドイツ文学、その中に子どもの本を置いて考えてみる視点、欧米の子どもの本の世界へと、わたくしに道をつけてくださったのは、野村先生でした。またドイツの子どもの本に関する記事などを見つかけられると、「吉原君、お読みになりましたか？ どう思いますか？」といつもお声をかけていただきました。そのお声ももうお聞きできません。また研究会の後、神保町などに先生

の案内で繰り出し、先生の行きつけのお店で飲むこともできません。「吉原君、もういいのかい？」に、わたくしが「あのお酒が飲みたいです」と答えると、必ず喜んでくださった先生でした。

Wegbereiter というドイツ語があります。あとに続く者たちに道を整備する者、という意味でしょうか。先生はわたくしの道を整備してくれただけでなく、日本のドイツ児童文学研究の Wegbereiter でもあったと思います。



野村 滋 先生

略歴

1925年 東京都に生まれる
 1943年 東京外事専門学校（東京外国語大学の前身）ドイツ科入学
 1946年 同卒業
 1947年 京都大学文学部独文科入学
 1950年 同卒業
 1950年 京都大学大学院入学
 1952年 同修了
 1952年 東京外国語大学非常勤講師
 1955年 同助手
 1958年 同講師
 1960年 同助教授
 1967年 同教授
 1987年 同定年退官
 2023年3月23日 死去

主要論文・著書・翻訳

1961年 「現代ドイツ児童文学の特質」『東京外国語大学論集』15号、東京外国語大学。
 1969年 「ヒューリマン著『子どもの本の世界1300年の歩み』福音館書店（翻訳）。
 1971年 「グリム昔話の残酷性」『東京外国語大学論集』21号、東京外国語大学。
 1974年 リューティ著『昔話の本質』福音館書店（翻訳）。
 1974年 ウェルフェル著『灰色の畑と緑の畑』岩波書店（翻訳）。
 1975年 「昔話とプレヒト」『文学』34巻3号。
 1976年 「グリムの昔話とキリスト教」『岩波講座文学』4、岩波書店。
 1980年 フェアマン著『隣の家の出来事』岩波書店（翻訳）。
 1982年 リューティ著『昔話の解釈』福音館書店（翻訳）。
 1986年 「神話と昔話」『東京外国語大学論集』36号、東京外国語大学。
 1988年 『昔話と文学』白水社。
 2006年 グリム兄弟著『完訳グリム童話集』全7巻、筑摩書房（翻訳）。
 2009年 『ドイツの子どもの本（増補新版）：大人の本のとのつながり』白水社。

在間進先生を偲んで

Dem Andenken Prof. Susumu Zaimas

藤縄 康弘

東京外国語大学大学院教授

Yasuhiro FUJINAWA

Tokyo University of Foreign Studies, Professor

1979年から2008年まで、30年という長きにわたり本学ドイツ語学科で教鞭を執り、ご退職後も独和辞典の編纂やドイツ語学習者のための参考書・問題集・単語集等の制作に精力を傾注していらした在間進先生が、2023年4月13日、78歳で突如としてこの世を去られた。数多くの学生を指導し、彼らの寄稿を通じて本誌とも浅からぬ縁で結ばれていた先生のあまりにも早い旅立ちを心から悼むとともに、生涯研究者・教育者を貫いた在りし日のお姿を偲ぶことで、残された者たちにとって道しるべとなるものを見つけ出したい。

在間先生は本学在職時、月曜5限に大学院の授業を開いていた。その場に私はじめて参加したのはまだ学部生のころだった。専攻語の授業で私が質問したことがよほど気に入られたのか、授業後に先生が「よかったら大学院の授業に顔を出してみないか」と声をかけてくださったのがきっかけである。この授業には、本来の院生だけでなく、修了生や先生を慕う同輩・後輩の先生方が大勢集っていた。在間先生はまだ新進気鋭だったこともあり、門下生たちを高所から超然と教え導くというよりも、彼らと同じ目の高さで議論をする姿勢に徹していた。知ったかぶりは一切しない。若い研究者の卵が背伸びをして持ち出すどんなに高名な学説に対しても、首尾一貫しないところがあれば悉くそこを突いたし、それに対する答えが通り一遍に留まるようであれば、それを決してよしとせず、ますます鋭く追求した。一方、追求を受ける院生らも辛抱強かった。たとえその場では一旦引き下がらざるを得なくても、次回には別の反論材料を用意して新たに論戦を挑む。すると、在間先生は……、というサイクルを何度も目のあたりにしたものである。

とはいえ、在間先生は院生らに自身の意見を押し付けることはしなかった。自らに対する批判も含めて言い分があれば、誰にでも何でも言わせていた。こうし



て喧々諤々の議論が絶えず繰り広げられる研究室は、おのずと活気と熱気に満ち溢れていた。このような環境の中で、私は「自分の頭で考えること」を何よりも大切にする先生の姿勢を学ばせていただき、それを研究上の「型」として身につけさせていただいたのだと思う。

在間先生のこうした教育スタイルは、安易に権威を奉らないという信条に基づいていたと思われる。この信条は学外でも一貫していた。先生は長らく日本独文学会の理事をお務めになり、その時期は私の院生時代とも重なったのだが、その時期に先生は、学会のいくつかの悪しき慣例を断つことに貢献された。たとえば、研究発表会で学生が発表を行うのは、今日ではごく普通のことになっているが、当時は前例がなく、申込みすら憚られるような雰囲気だった。それに正面から異を唱えたのが在間先生だった。先生は（そのころご本人から直接伺ったところによれば）、「研究内容が未熟だから落とすのは当然だが、単に学生だからという理由で門前払いにするのはおかしい」ということを理事会で粘り強く主張なさったようである。

また、日本独文学会の語学ゼミナール (Linguisten-Seminar) も、在間先生が実行委員長になってからいまのかたちが定着した。それまでの語学ゼミは、「本場ドイツ」(当時は隔年で西ドイツと東ドイツ) から「偉大な」先生を講師にお招きし、その講話をひたすら「ありがたく」拝聴するような合宿だったらしい。こうした卑屈とも言える態度は、独文学会に限らず、明治以来の日本社会のいたるところで、西洋崇拝の現れとしてありがちなことだった（あるいは、いまなおありがちなことだ）と思うが、そこに在間先生は、日本側参加者による研究発表という思い切った企画を追加した。そうして日本側からも成果を発信することで、日独間の対等な研究者交流の実現を目指されたのである。それから30有余年の歳月が経ち、語学ゼミは2024年、第50回の節目を迎えた。いまでは多くの日本側参加者が自発的に研究発表を行い、その中には本学関係者を含めて若手が少なくない。しかも、そうした若手の発表がときに招待講師からも真剣な質問や反論を引き出すことがある。そのような場面に遭遇するにつけ、在間先生の撒いた種が着実に芽吹いていることを実感するとともに、先生への感謝の念を新たにするのである。

研究者としての在間先生は、進取の気風に富んだ方であった。学界への出世作となった名詞化に関する論文を発表した1970年代は生成文法と真摯に向き合っておられたが、その後、1980～90年代になると、今日的視点から「認知言語学」と呼ぶべき研究で先駆的な業績を上げられた。さらに2000年代には、コーパスを活用した研究の牽引者となった。研究者には大きく言って、ひとつのことをと

ことん追求する「この道一筋」タイプと、次々に新機軸を打ち出す「変幻自在」タイプとがある。一概にどちらがよいと言えるものではないが、方法論的に絶えず変化を遂げていった在間先生の場合、一見すると後者のタイプのようである。それでいて、その変化の根底には一貫して「ドイツ語」があったこともまた間違いない。在間先生は、ありきたりで単純な二者択一にやすやすと落とし込まれるような方ではなかったのである。

そんな在間先生が、かつて同窓会のコラムで「真理」についてこんなシンプルなことを仰っている：

「なせば成る，なさねば成らぬ，何事も」—ありふれた言葉だが，真理に思えてならない。(『東京外語会報』第99号，2003年11月)

これは、先生にしてみれば、当時、本学副学長として教育改革に取り組む中でふと抱いた雑感に過ぎなかったものであろう。しかし、私には、これが研究にも大いに通じているように思われる。ここで先生は「真理が、何もせずずっとそこにある、とあてにしているはいけないよ」と親身に諭してくださっているかのようだ。と同時に、真理のために果たして何をなすべきかは、各自が「自分の頭で考えなさい」と叱咤激励しているようでもある。

その意味でこのお言葉は、ドイツ語学に携わる者であれ、文学に携わる者であれ、はたまたそのいずれにも取まらない新たな領域を開拓する者であれ、我々あとに続く研究者（の卵）たちに在間先生が図らずも残してくださった貴重なご遺言である。在間先生には、我々の活動をこれからも草葉の陰で温かく見守っていただきたいと切に願う。



在間 進先生

略歴

1969年 東京外国語大学大学院外国語学研究科 ゲルマン系言語専攻 修士課程修了
 1969年 熊本大学法文学部 助手
 1971年 同 講師
 1973年 Institut für deutsche Sprache 専任研究員
 1976年 東京都立大学 助教授
 1979年 東京外国語大学外国語学部 助教授
 1991年 同 教授
 2008年 同 定年退官
 2023年 4月13日 死去

主要論文・著書・翻訳

1975年 „Zum Problem der Nominalisierung im Deutschen und im Japanischen“, 『ドイツ文学』 55号, 日本独文学会, 120-134頁。
 1987年 „Verbbedeutung und syntaktische Struktur“, *Deutsche Sprache*, Heft 1/1987, S. 35-45.
 1989年 „Aktivität und Resultativität transitiver Verben im Deutschen“, in: Fries, U./M. Heusser (Hgg.), *Meaning and Beyond. Ernst Leisi zum 70. Geburtstag*, Tübingen: Gunter Narr, S. 215-222.
 1990年 「ドイツ語の動詞と統語構造」『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』

国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編, くろしお出版, 235-252頁。

1992年 『詳解ドイツ語文法』大修館。
 1994年 「統語構造の意味機能」『ドイツ語学研究 2』千石喬, 川島敦夫, 新田晴夫編, クロノス, 133-146頁。
 1999年 „Satzsemantik vs. Valenztheorie“, in: Nitta, H./M. Shigeto/G. Wienold (Hgg.): *Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen*, München: Iudicium, S. 133-144.
 2001年 „Valenzvergleich und ‚valenzbasierte‘ Eigenschaften des Deutschen – im Vergleich mit dem Japanischen“, in: Schröder, H./M. Gonzalez/P. Kumschlies (Hgg.), *Linguistik als Kulturwissenschaft. Festschrift für Bernd Spillner zum 60. Geburtstag*. Frankfurt u.a.: Lang, S. 297 -306.
 2002年 「ドイツ語研究の方法論」『新しいドイツ語文法構築への試み—命題の成立条件とその周辺—』(日本独文学会研究叢書011号), 日本独文学会, 井口靖編, 60-68頁。
 2004年 『エクセル独和辞典 新装版』初版, 郁文堂。
 2021年 『新アクセス独和辞典』第4版, 三修社 (1999年, 初版)。

谷川道子先生との思い出文—その言葉と声から

Remembering Prof. Michiko Tanigawa:
Her Words and Voices

小松原 由理

上智大学文学部教授

Yuri KOMATSUBARA

Sophia University, Professor

谷川道子先生が急逝されてからもう一年近くたつ。最初の数か月は、何も言わずに去って行った恩師に、置いていかれたような空虚な気持ちをなかなか埋めることができずに苦しんだ。特に涙もろい性格でもないはずなのに、どこにいても不意に涙が出た。これは、自分でも不思議な現象だった。この頃の苦しさは大学院の大先輩である本田雅也さんや谷川塾（先生が退職後にご自宅ではじめられた私塾）で知り合うことができた方々と気持ちを共有し合うことで、どうにかこうにか乗り越えることができた気がする。何も言わずに去って行った、などと書いたが、つまりは谷川先生が何でも言ってくれる人だったこと、時に強めの言葉も多かったけれど、相手と共有することで、その先に何かが開かれていくと信じることを、決してあきらめない人だったことに、改めて気づかされた。気づかされて、先生の言葉をもう一度、集めておかねばと今は思っている。いつかちゃんと、然るべき相手に私もまた伝えられるように。以下のまとまりのない思い出文は、そういう意味で自分へのメモ書きでもある。

▶ 「やっぱりブレヒトが一番好き」

東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科 B 組の一生徒という立場で見ていた谷川先生の授業は、シンプルに楽しかった。言いよどみなく流れるような説明だったとか、高度な資料性のある優れたプレゼンテーションだったとかではなく、「何か探求すべきものがそこにある」ということを気づかせてくれるような、巧みなリズムが先生の語りにはあった。このリズムは、やはりブレヒト由来だったのではないかと今は思う。私自身は2000年前後に谷川先生に指導をいただいた学年にあたるので、使用教材は専らハイナー・ミュラーかエルフリーデ・イエリ



ネクだった。学生としては彼らの難解なテキストに何とか食らいつくのには必死だったわけだが、谷川先生はおそらくずっとプレヒト受容というまなざしから両テキストを辿っていたのだろう。つまり、ミュラーやイエリネクの戯曲を翻訳し、演劇界におけるその位置を日本に、あるいは学生たちに紹介するという立場と共に、プレヒトの射程が彼らを通して、どう広がったのかというプレヒト研究者の視点から先生が離れたことはなかったのではないかと。退官された後、先生はハワイで開催されたプレヒト学会に参加されたのだが、その頃の先生は、ようやく再び100%プレヒトに向き合えるのだという喜びに満たされているように見えた。『聖母と娼婦を超えて：プレヒトと女たちの共生』（花伝社、1988年）に始まる先生の数多の輝かしい業績には、深いプレヒト演劇への理解からくる、唯一無二の視点が込められている。私の他、先生の孫世代を含め、皆がいま一斉にプレヒトを読み直しているのは、谷川先生の声がいつでも同時に聞こえてくるような気がするからかもしれない。

▶「女性だけで集って何かする、というのはあまり好きじゃないの」

大学院に進学し、先生からの指導をうけ、なんとか就職した後も、ずっと先生は常に「見ていてくれる存在」として、私のなかに在り続けた。結婚、出産、子育て、異動、そんなライフステージの変化ごとに、必ず先生に報告をし、また先生からも言葉をいただいた。その時々言葉は、繊細で思いやりに満ちた先生の人柄そのものが溢れるものだった。そんなやり取りの中で、特に強く思い出すのは、どうして先生が研究者になったのかという話を聞かせてくれたことだ。鹿児島島の文学少女時代のこと。大学では学生新聞の記者をするような社会派だったこと。大学院に行くこと決めて、片っ端からドイツ文学を読み漁ったこと。修士論文は自然主義演劇についてだったということ。舞台俳優の道を目指したことがあるということ。プレヒトの演劇を研究するうえで、男性中心主義的な視点にからめとられないように、自分の視点を確立しようともがいたこと。振り返れば九州大学赴任時代が一番楽しかったということ。成城大学時代には先生のファンが最前列に座っていたということ。その後、名家に嫁いでしまったこと。教授時代は東京でお姑さんと同居していたこと。そしてお姑さんとおやつタイムがとても楽しかったということ。「私は命がけで研究してきたからね」——陽気ないつもの声だったけれど、昭和という男性も女性も皆が息苦しかった時代を、女性研究者として駆け抜けた、率直な振り返りの言葉だったに違いない。芸術の領域は、なかでも演劇研究の領域は、古くから男性中心の文化であり、そこに女性研究者として「対等に」入っていくには、自ずと様々な工夫が要求されたのだろう。上記に

紹介した先生の言葉には、そういう先生の生半可ではない覚悟と強さが確かにあった。プレヒトの『肝っ玉おっ母とその子供たち』を『母アンナの子連れ従軍記』(光文社古典新訳文庫, 2009年)で新たに訳し直したことから、言葉の選択そのものが社会を変えることに繋がるのだという、先生の深いプレヒト理解が見えてくる。

▶ 「ケチな人にはケチな人生しか歩めない」

2018年に研究休暇で1年外大に戻る機会があり、そこでなぜか谷川先生とお仕事を一緒できる幸運に恵まれた。きっかけは先生が多和田葉子のハイナー・ミュラー論の日本語訳を出版するという企画に携われる人を探していたからなのだが、声をかけられていた最初のメンバーでもなかった私が、なぜか色々取りまとめをしなければいけない形になった。いざ企画が走り出すと、ドイツ演劇の専門家ではない私に、日本の演劇の未来形の人たちを次々に引き合わせ紹介してくださった。京都の劇団地点のアンダースローで、三浦基氏に稽古場を見せていただいたり、くにたちで多和田葉子演劇を市民と共に取り組む演出家の川口智子氏を繋いでくださった。今も、先生の立ち上げたTMP (Tawada/Müller/Project) で一緒した方々の何人かとは、細々ながら良い交流が続いている。2024年の11月には多和田葉子とくにたちをめぐるシンポジウムを行い、TMPで一緒だったメンバーを中心に、多和田葉子の演劇を考える機会をつくらせていただくこともできた。一度先生の前で「私はダダの研究者なので、演劇には遠いのですが」と口にしたことで、それまで和やかに話をしていたのに、突然思いきり叱られたことがある。自分で勝手に囲いをつくって小さく守りに入った、そういう意味で「ケチ」な私に、「言わねばならない」と思われたのだろう。当時はそこまで叱られることかとも思ったが、今はむしろあの時の先生の気持ちを汲み取ることができなかった自分の小ささが悔しい。先生にとって、きっとわたしのような不肖な教え子でも、自分自身の延長なのだと本気で思ってくださっていたのではないだろうか。

▶ 「ガンバ！」

ちなみに私自身もいま、文学部の一教員として、学生たちの前であだこうだと話をしているが、常に自問するのは、あのときの谷川先生のように、それぞれの関心に訴えかけるような語りができているかどうかということだ。器用な語りじゃなくても、剥き出しのままでも、言葉がちゃんと相手に届くような語りができているかどうか。一つだけ、学生から最近よく言われる嬉しい言葉がある。そ

れは、「一番人間らしい先生」だという評価。そもそも褒められているわけじゃないことはよくわかっているけれど、全く悪い気がしていない。どころか、なんだか谷川先生マインドを引き継いでいるかもしれない、と今は勝手に嬉しんでいる。先生がブレヒトに始まり、最後に再びブレヒトの仕事に戻っていったのもまた、人間臭さを大肯定するブレヒトへの本質的な共鳴があったからではないだろうか。もちろん、私は先生のような超人的スケールで、人と人を繋げるような、そんなことは到底無理だし、どちらかという一人であるのが好きな性分は変えようもない。それでも、他者と共有できる時間の尊さや豊かさをしっかりと理解できる自分でいたい。おそらくは、いや、完全に私は谷川先生との出会いによって変わった人間の一人なのだ。「ガンバ！」——先生の明るい声に、いまだ背中を押してもらっている、そんな一人でもある。



2018年夏、ドイツ文化会館1Fのカフェで



谷川 道子先生

略歴

1970年 東京大学文学部ドイツ文学科 卒業
 1974年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程
 中退, 九州大学教養部 専任講師
 1976年 同 助教授
 1978年 成城大学経済学部 助教授
 1986年 同 教授
 1987年 東京外国語大学 助教授
 1993年 ウィーン大学 客員教授
 1996年 東京外国語大学 教授
 2010年 同 定年退官
 2024年 1月9日 死去

主要論文・著書・翻訳

1976年 ベルトルト・ブレヒト著『ブレヒト作業
 日誌』河出書房新社（共訳）。
 1988年 『聖母と娼婦を超えて ブレヒトと女たち
 の共生』花伝社。
 1992年 ハイナー・ミュラー著『ハムレットマシー
 ン シェイクスピア・ファクトリー』未来
 社（共訳）。ドナルド・スポーター 著『ロッ
 テ・レーニャ ワイマル文化の名花』文
 芸春秋（翻訳）。
 1993年 ハイナー・ミュラー著『メディアマテリア
 ル ギリシア・アルシーヴ』未来社（共訳）。
 ハイナー・ミュラー著『闘いなき戦い ド
 イツにおける二つの独裁下での早すぎる
 自伝』未来社（共訳）。
 1994年 ハイナー・ミュラー著『カルテット ミュ
 ラー・コンテンポラリー』未来社（共訳）。

1999年 ヨッヘン・シュミット著『ピナ・バウシュ
 怖がらずに踊ってごらん』フィルムア
 ート社（翻訳）。
 2000年 『ハイナー・ミュラー・マシーン』未来社。
 『境界の「言語」 地球化/地域化のダイナ
 ミクス』新曜社（共編）。
 2002年 ハンス＝ティース・レーマン著『ポスト
 ドラマ演劇』同学社（共訳）。
 2005年 『ドイツ現代演劇の構図』論創社。
 2006年 エルフリーデ・イェリネク著『汝、気
 にすることなかれ シューベルトの歌曲にち
 なむ死の小三部作』論創社（翻訳）。
 2007年 エルフリーデ・イェリネク著『レストハ
 ウス、あるいは女はみんなこうしたもの』
 論創社（翻訳）。
 2009年 ベルトルト・ブレヒト著『母アンナの子
 連れ従軍記』光文社古典新訳文庫（翻訳）。
 2010年 『演劇インタラクティブ 日本×ドイツ』
 早稲田大学出版部（共編）。
 2013年 ベルトルト・ブレヒト著『ガリレオの生
 涯』光文社古典新訳文庫（翻訳）。
 2014年 ベルトルト・ブレヒト著『三文オペラ』
 光文社古典新訳文庫（翻訳）。『演劇の未来
 形』東京外国語大学出版会。
 2015年 ベルトルト・ブレヒト著『アンティゴネ』
 光文社古典新訳文庫（翻訳）。
 2020年 『多和田葉子/ハイナー・ミュラー 演劇
 表象の現場』(共編)。
 2021年 『多和田葉子の〈演劇〉を読む 切り拓か
 れる未踏の地平』(共編)。

ローベルト・ヴァルザーの絵画認識と再創造 — 絵画テキストにおける知覚と記憶について —

Zwischen Lesen und Nacherzählen:
Über die Wahrnehmung und die Erinnerung in Robert Walsers
Texten zur Malerei

木村 千恵

東京外国語大学大学院特別研究員

Chie KIMURA

Tokyo University of Foreign Studies, Research Fellow

Abstract

Die späten Werke Robert Walsers sind gekennzeichnet durch eine komplexe und schwer zugängliche Erzählstruktur, die auch für die moderne Literatur typisch ist. Diese Komplexität resultiert aus der Aufnahme und anschließenden Nacherzählung anderer Werke. Dieser Beitrag fokussiert sich insbesondere auf Malerei als Quelle und analysiert ihre mediale Wirkung auf Walsers Texte.

Zu Beginn erfolgt eine Zusammenfassung der bisherigen Diskussionen zu Form und Merkmalen von Walsers Texten zur Malerei. Anschließend werden die verschiedenen Zeitdimensionen in seinen Texten aus der Perspektive seiner Erinnerungen analysiert, wobei sein Gedicht „Renoir“ (1927)¹ als Ausgangspunkt dient. Dabei werden die verschiedenen Zeitdimensionen in seinen Texten aus der Perspektive seiner Erinnerungen analysiert. Zum Schluss wird der Einfluss der Wahrnehmungsweise zeitgenössischer Künstler auf Walsers kreative Methoden untersucht. Hierbei werden Walsers Texte wie z.B. „zu der Arlesierin von van Gogh“ (1912) und „das Van Gogh-Bild“ (1927) durch einen Vergleich mit zeitgenössischer Kritik sowie Van Goghs eigener Korrespondenz analysiert.

Diese Analyse klärt die Verbindung zwischen Walsers „Lesen“ und „Nacherzählen“, die die Grenze zwischen der in den Bildern verwobenen Zeit und der Zeit des Betrachters verschwimmen lässt. Zusammenfassend kann festgehalten werden, dass für Walser sowohl vergangene Ereignisse als auch Malerei gleichermaßen behandelt werden. Durch das Erzählen erscheinen sie immer wieder vor seinen Augen und führen zu seiner fortwährenden kreativen Neuschöpfung.



はじめに

スイスの作家ローベルト・ヴァルザー (Robert Walser, 1878-1956) の特に後期にあたるベルン時代 (1921-1933年) の作品は², 読者を翻弄するようなとりとめのない語りを特徴としている。例えば、「ベルギーの美術展」(Belgische Kunstausstellung, 1926) では、冒頭で美術展の訪問というテーマが提示されるが、すぐさま読者の予想や期待は裏切られ、本題であるはずの絵画に関する話題は後退してしまう。その代わりに、関連する語り手自身の経験や、絵画から喚起される空想などが次々と語られるため、一見すると脈絡のない話題が書き連ねられているようにも見える。こうした文体は、彼の代表作である長編小説『盗賊』(Der »Räuber«-Roman, 1925) にも見られるように、この時期のヴァルザーの散文に顕著な傾向であり、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』(Ulysses, 1922) やヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』(Mrs. Dalloway, 1925) などの、時を同じくして発表された同時代のモダニズム文学と似通った特質を備えている。

ヴァルザーの独自の語りの特徴は、他の芸術作品の参照や語り直しによって形成されている。彼は身の回りの日常風景から着想を得て、さまざまな要素を自らの作品に取り入れており、芸術鑑賞の経験もそれに含まれている。他の作品の参照は、多くの作家や芸術家によって伝統的に行われてきたが、ヴァルザーの特筆すべき点は、自作との整合性を度外視し、異なるエピソードが自由な連想によって導かれていることである。各要素は元の文脈の特性を強く残しているため、物語の筋や語りのモードの一貫性から逸脱したものとなりやすい。その結果、組み込まれた話題に不調和が生じ、唐突な話題転換が起こる印象を与えている。

ヴァルザーは文学や美術、音楽などのさまざまな芸術について言及しているが、その際、それぞれの素材がどのような特質を備えているかが、ヴァルザーの語りを規定している。例えば、文学と絵画は、それぞれ情報を提示する方法が異なっ

¹ 本論文で引用するローベルト・ヴァルザーのテキストには、以下のものを用い、括弧内に略号、巻数、ページ数を順に示している。SW: Robert Walser: *Sämtliche Werke in Einzelausgaben*. Hg.v. Jochen Greven. Frankfurt: Suhrkamp, 1985. Br.: Robert Walser: *Briefe*. Hg.v. Jörg Schäfer unter Mitarbeit v. Robert Mächler. Genf, Hamburg: Kossodo, 1975.

² ヴァルザーの創作時期は、彼の居住地にしたがって、初期 (1889-1905年)、ベルリン時代 (1905-1913年)、ビール時代 (1913-1921年)、ベルン時代 (1921-1933年) と4つに分類されている。明確な筋のないおしゃべりのような文体は、ベルリン時代に発表された三作の長編小説『タンナー兄弟』(Geschwister Tanner, 1907)、『助手』(Der Gehülfe, 1908)、『ヤーコプ・フォン・グンテン』(Jakob von Gunten, 1909) や、ビール時代に書かれた中編小説『散歩』(Der Spaziergang, 1917) など、ヴァルザーの活動期間全体を通して一貫して見られる傾向であるが、ベルン時代に特に先鋭的なかたちで現れている。

ている。文学は線形的なコードで情報を提示するが、絵画は平面的なコードを用いて情報を配置する。そのため、絵画を文学として語り直すには、異なる構造へのコード変換が必要である。このメディアの特性の違いがヴァルザーのテキストに反映され、ヴァルザー独自の語りとなって表れている。本稿は、絵画を文学へ語り直す際に、そのメディア的特性の差異がテキストに与える影響に焦点を当て、ヴァルザーの作品の構造性を分析する。このように、視覚情報が言語に転換されるプロセスをたどることで、ヴァルザーの思考方法を理解する手がかりが得られるはずである。

ヴァルザーと絵画の関係を考察するこれまでの研究では、主に伝記的要素に関する指摘や、特定の絵画のモチーフや形式がヴァルザーのテキストにどう受容されているかに焦点が当てられてきた³。本稿はこうした観点を踏まえつつ、絵画のメディア的特質がヴァルザーのテキストの構造にどのように作用しているかを探求する。この分析を通じて、ヴァルザーが絵画をどのように知覚し、解釈しているのか、そしてそれがどのように他の経験と結び付けられ、ヴァルザーの独自の方法で再構成されているのかを検討する。

まず、これまでの研究を参照しながらヴァルザーが絵画を題材とするに至った経緯を概観し、彼の絵画テキストの特徴を整理する。これにより、ヴァルザーの題材の選定や、絵画を文学で語ることの意味づけを考察する。次に、ヴァルザーの絵画テキストに特徴的な記憶の問題に注目し、語り手と物語の位置関係を分析する。具体的には、絵画鑑賞経験や語り手の現在の状況が作品にどのように反映され、統合されているかを検討し、その経験を想起する語り手自身が自己反省的に意識化されるプロセスを観察する。最後に、同時代の芸術家の知覚のあり方とヴァルザーの創作手法の関係を分析するために、ゴッホを具体例として取り上げる。特に、ゴッホは同時代の文壇に大きな影響を与えており、ヴァルザーのテキストの中でも言及数が多い。同時代のゴッホ評価とヴァルザーの態度との相違や、同時代の絵画が彼の外界の観察方法に与えた影響を検討する。これを通じて、絵画を文学へと転換する際のヴァルザーの思考プロセスや、同時代のモダニズム芸術との関係が、ヴァルザーの創造性にどのように寄与しているか明らかになるはずである。

³ ヴァルザーが特定の絵画について言及したテキストは、ヴァルザーの散文と兄カールの絵画を収録した『カール&ローベルト・ヴァルザー兄弟』、代表的な散文や詩とその対象になっている絵画を並置した『絵画の前で』などのアンソロジーとして出版されている。

Echte, Bernhard, Meier, Andreas (Hg.) : *Die Brüder Karl und Robert Walsers. Maler und Dichter*. Stäfa, 1990. Echte, Bernhard (Hg.) : *Robert Walsers: Vor Bildern*. Frankfurt u. Leipzig: Insel, 2006.

1. ヴァルザーの絵画テキストの特質

ヴァルザーは音楽や演劇、舞踊など、さまざまな芸術ジャンルに言及しているが、なかでも絵画は彼の創作にとって極めて重要な役割を果たしている。特定の絵画を題材とした散文や詩、画家を主人公とする小説ばかりでなく、絵画を思わせるような風景や人物の描写からも、ヴァルザーの作品と絵画との親密な関係が見て取れる。これは、彼の兄で当時は著名な画家であったカール・ヴァルザーからの影響といえる。ヴァルザーは一歳年上のカールの創作を見て育ち、共同で創作を行うこともあった。後年、疎遠になってからも、カールをモデルとした登場人物やカールの作品を自身の作品に取り入れるなど、兄弟の関係が彼の文学的表現に影響を与え続けたことが知られている⁴。

さらに、カール・ヴァルザーを介したベルリン分離派とのつながりも、ヴァルザーの文学活動や題材の選択に深く関わっている⁵。1905年、カールを頼ってベルリンに移り住んだヴァルザーは、ベルリン分離派に属する芸術家と交流を持つことになった。特に、その中心的人物である画商パウル・カッシーラのもとで、1907年4月から9月まで秘書として働いていた間、ヴァルザーは美術展の開催に携わるなどして、ドイツにおける印象派の紹介やモダニズム芸術の先駆けを間近で目にしている。

これらの経験がヴァルザーの活動にも現れている。この時期、ヴァルザーは『芸術と芸術家』(Kunst und Künstler)をはじめとする、さまざまな雑誌に作家や芸術家、絵画、演劇、舞踊等を題材とした散文作品を寄稿している。さらに、約20年後の1925年から1937年にかけて、『プラハ新聞』(Prager Presse)⁶には絵画を題材としたヴァルザーの詩や散文が数多く掲載された。これらの文章のいくつかは、彼が若い頃にベルリンで鑑賞し、記憶に留めた分離派の展覧会の作品と一致する。このように、ヴァルザーのベルリン時代の経験は、彼の文学活動に深く根ざしていることがわかる。

こうして書かれたヴァルザーの絵画テキストは、明確な特徴を見いだすのが難

⁴ 「ある画家の人生」(Leben eines Malers, 1916)におけるカールをモデルとした主人公や、『盗賊』のモチーフとなった水彩画など、多くの作品の中でカールの絵画が言及されている。

⁵ カールは1903年からベルリン分離派に所属し、ヴァルザーがベルリンに滞在していた1906年から1913年までの間、分離派の役員を務めていた。Evans, Tamara S.: »Ein Künstler ist hier gezwungen aufzuzuhorchen«: Zu Robert Walsers Kunstrezeption in der Berliner Zeit. In: Fattori, Anna, Gigerl, Margit (Hg.): *Bildersprache, Klangfiguren. Spielformen der Intermedialität bei Robert Walser*. München, 2008, S. 107–116.

⁶ ヴァルザーは、他の新聞や雑誌を大きく上回る200以上もの文章を『プラハ新聞』に寄稿していた。(Br. 435f.)

しいことが多い。彼の文章には明確な主張がなく、アイロニーに満ちた表現が使用されるため、その言説にはある程度の留保が必要である。また、彼が言及した絵画は、古典美術から当時の現代美術に至るまで多岐にわたるが、そこに特定の嗜好が現れているわけではない。その出典をたどると、分離派で好まれた画家やスイス国内の美術館や個人宅に展示されていた絵画、散歩中に目にした複製画などが挙げられる。したがって、ヴァルザー自身が目にする機会のあったものを作品の題材として取り上げていたと考える方が自然である。

また、形式的な面からも、彼の作品の特質を把握することは容易ではない。例えば、エヴァンスはヴァルザーの創作時期とテキストの形式に注目して、三つの分類を提示している⁷。

- (1) 1920～1933年に発表された少数の詩
- (2) ベルリン時代以降の作家としての時期全体を通じて執筆された、個々のキャンパスを説明する散文テキスト
- (3) 1920年代半ば以降の視覚芸術に関するコラージュ風のテキスト

この分類は、ヴァルザーの前期から中期にあたる(2)ベルリン時代以降の時期(1905-)と、後期にあたる(3)ベルン時代(1921-1933)という、創作時期の違いによる作風の変化、ならびにベルン時代における(1)詩と(3)散文というジャンルによる違いを示している。しかし、創作時期とテキストのジャンルに一定の相関関係があるとしても、その特徴に際立った差があるわけではない。むしろ、ヴァルザーの作品の特徴は創作時期全体を通して一貫しており、初期の作品に見られた特徴が時代を経るごとに発展していったと捉えることもできる。

本稿は、ヴァルザーの絵画の認識方法を把握することを目的としていることから、ヴァルザーの嗜好やテキストのジャンルといった点よりは、以下に見るように、ヴァルザーのテキストに共通して見られる特質に焦点を当てる。

(1) 描写の不正確性

ヴァルザーの絵画テキストの特徴の一つは、詳細な描写と不正確性の両方を含むことである。例えば、ヴァルザーが《ウルビーノのヴィーナス》を題材として執筆した詩「ティツィアーノのヴィーナスについてのソネット」(Sonett auf eine Venus von Tizian, 1927, SW13, 161)では、実際の絵画と異なる描写が見られる。

⁷ Evans, Tamara S. (Hg.) : *Robert Walser and the Visual Arts*. New York, 1996, S.28.

ヴィーナスの髪の色や、背景のチェストが誤って祭壇と記述されていることが指摘されている⁸。もちろん、ヴァルザーが複製画や複写を元に創作することもあったため、参照した絵画がオリジナルと異なっていた可能性もあるが、ヴァルザーにとって重要なのは、正確性よりも独自の視点や意味づけを提供することだった。

こうした特徴は、ベルリン時代にマックス・リーバーマンの画集⁹を論評した散文「リーバーマンの絵画のABC」(Ein ABC in Bildern von Max Liebermann, 1909)にも、すでに表れている¹⁰。エヴァンスが指摘するように、この散文は、実際の絵画の内容や形式についての詳細な議論や形式的なカテゴリーに触れず、同時代の絵画批評の枠組みからは外れている¹¹。ヴァルザーの場合、絵画の寸法や材料、構図などの形式にはほとんど言及せず、具体的な内容の再説明も行わない。同じ画集を紹介した同時代の批評家ハイルブットの文章¹²と比較すると、ヴァルザーの散文では、個々のイラストに関する具体的な描写が少なく、その代わりに画集全体から受ける印象や、そこから展開される空想的な要素が強調されている。さらに、この散文では、記述の信頼性が揺るがされている箇所が含まれている。

もしかしたら、少し違った振る舞いをしているかもしれません。これからこの本を手にとろうとする人は、わたしがどれくらい思い違いをしていたかを知ることになるでしょう。(SW15, 69)

ヴァルザーの散文では、「B は海のかげらに、F は子どものような笑い声に [[…]]」

⁸ Echte: Nachwort. In: Robert Walser: Vor Bildern. 2006, S.110.

⁹ Liebermann, Max: *Ein ABC in Bildern. Mit begleitenden Worten von Richard Graul*. Berlin, 1908. この画集は、芸術・文芸雑誌『パン (Pan)』でドロップキャップとして用いられたリーバーマンによるイニシャル装飾のイラストをまとめて出版したものである。本書は、Center for Jewish Historyのオンライン・アーカイヴでも確認することができる。(最終閲覧日: 2024年8月10日) https://links.cjh.org/primo/CJH_ALEPH005529089

¹⁰ ベルン時代の作品には、これまでのテキストと比べて、絵画の内容が詳細に描写されるという違いがある。これらのテキストは、スイスから地理的に離れた『プラハ新聞』で発表されており、同紙には図版も掲載されていない。したがって、読者がテキストの中で言及されている絵画を見ていることを想定したものではないため、絵画について語る際に画像的な描写を取り入れる必要があったと考えられる。

¹¹ Evans, 2008, S. 107–116.

¹² リーバーマンのイニシャル画は、1906年に画商エーミール・ハイルブットによって『芸術と芸術家』誌上で18点の図版とともに紹介された。Heilbut, Emil: Ein Alphabet von Max Liebermann. In: *Kunst und Künstler* 4 (1905-1906), S.106. ハイルブットによる本エッセイは、ハイデルベルク大学のオンライン・アーカイヴでも公開されている。(最終閲覧日: 2024年8月10日) <https://doi.org/10.11588/diglit.4390#0113>

と述べられているが、リーバーマンの画集には、実際には「B」のイラストが日の出または夕暮れの牧場の風景と、椅子に腰かける老人の二つしか収められておらず、「F」のイラストにも、風景を眺めて物思いにふける人物が描かれている。このように、両者を比較すると、散文の記述と実際のイラストが一致しないことが明らかになる。語り手が自己言及的に示唆していることからわかるように、こうした描写の不一致は、意図的に挿入されたもの、あるいは故意に修正されずに残されたものだと考えられる。

ヴァルザーのテキストにおいては、絵画の客観的な描写よりも、個人的で主観的な経験が重視されている。そこでは、特定の状況のなかで知覚され、主観的に経験され、そして言語によって伝えられる要素が強調されている¹³。このように、ヴァルザーの絵画テキストは、同時代の絵画批評とは異なり、絵画自体よりも、それを認識する個人の思考過程に焦点を当てるものとなっている。

(2) 絵画描写における語りの介入

ヴァルザーのテキストのもう一つの特徴は、さまざまなテーマや描写が入り乱れ、一貫性や論理的な流れが欠如しているように見える点である。この複雑さの原因の一つは、ヴァルザーの語り手と絵画そのものとの関係にある。彼のテキストでは、絵画に描かれた内容と語り手の物語との時空間が交錯しており、その結果、それぞれがどの状況に属するのかが不明確になっているのである。この問題を整理するために、テキストの物語状況を語り手、絵画が描かれた状況、そして絵画に含まれる過去の経験という要素に分類する。

ヴァルザーの作品の語り手は、主観的な見解を述べていることを隠そうとはしていない。絵画を詳細に記述する詩においても、「わたしが言及しているように」¹⁴という語り手の行為や、「彼女の黒髪は、歌っているかのように見える」¹⁵といった語り手の知覚についての言及、さらには「わたしにはそう思われるのですが」¹⁶という語り手による主観的な見解を示す言葉が挿入されている。つまり、ヴァルザーの絵画描写は、詩人の知覚と解釈に基づいており、それが作品内で常に明らかにされている。

¹³ Sorg, Reto: »Irgendwo müssen Bilder eben plaziert werden.« Robert Walser und die bildende Kunst. In: Schuppli, Madeleine, Schmutz, Thomas, Sorg, Reto (Hg.): *Obne Achtsamkeit beachte ich alles. Robert Walser und die bildende Kunst*. Sulgen, 2014, S.32.

¹⁴ 「放蕩息子」(Der Verlorene Sohn, SW13, 139)

¹⁵ 「ティツィアーノのヴィーナスについてのソネット」(Sonett auf eine Venus von Tizian, SW13, 161)

¹⁶ 「ファン・ゴッホ」(Van Gogh, SW13, 143)

ヴァルザーのテキストは、絵画を現実のように読者に提示するのではなく、むしろ語り手の視点を通したものとして認識させることを意図している。そのため、テキスト内では絵画の模倣的な描写よりも、語り手の介入が強調され、絵画の解釈や語り手の記憶が新たなレイヤーで付け加えられている。こうしたプロセスにより、語り手の視点が支配的となり、物語られる事象と叙述の距離が生じているのである。

2. 記憶の中の絵画

ヴァルザーの絵画テキストを特徴づけるのは、(1) 描写の不正確性と (2) 語り手の介入である。これらの要素は、記憶の追体験を通してテキストが形作られる過程に導かれている。実際に絵画を鑑賞した時期と、その経験を文章に書いた時期との間に隔たりがあるため、思い出すという行為を通じて語っている自己への意識が向けられる。その結果、語り手は絵画の描写だけでなく、語り手自身の経験や現在の状況についても言及することになる。そのため、ヴァルザーの絵画描写を分析するには、語り手と物語世界との位置関係を整理しておく必要がある。

こうした構造が顕著に表れているのが、詩「ルノアール」(Renoir, 1927)である。この詩は、語り手が以前に目にした絵画を思い出す瞬間から始まる。実際の伝記的情報によれば、この絵画に関する記述は、ヴァルザーが1901年にベルリン分離派の展覧会を訪れた経験に基づいている。この記憶を思い起こす行為を通じて、詩の中では複数の異なる物語状況が交錯することになる。

この詩は一つの長い連として書かれているが、細かく見ると、それぞれの時間が異なる時制で区別されており、次の四つのカテゴリーに分類することができる。

- (a) 語り手が物語る現在の状況 (現在形)
- (b) 語り手が過去に絵画を鑑賞した状況 (過去形)
- (c) 絵画に描かれている内容 (過去形)
- (d) 語り手が絵画を鑑賞する前の状況 (過去完了形)

この詩は、以下の表に示すように、(a) (b) (c) (d) (b') (a') という順序で構成されている。(c) の末尾で (d) への転換が起こっていることを除けば、いくつかのまとまった詩行が、一つの時間の層を提示していることがわかる。これらのうち、(c) は絵画の詳細な描写を含むもので、語り手自体は登場しない。一方で、(a)、(b)、(d) に焦点を当てれば、語り手が展覧会で絵画を鑑賞した経験を回想する物語になる。つまり、(a) (b) (c) (d) (b') (a') という順序で展開するこの詩は、(a)、(b)、(d) という語り手の物語の中に、他の芸術家によって制作された絵画に関

する叙述 (c) が挿入されたものである。

(a)	Ich denke in meinem Wirkungsfelde mit einem Mal an ein Gemälde;	わたしは、自分の活動領域の中で 突然、とある絵画のことを考えています
(b)	es hing vor Jahr'n in der Sezession, besaß einen bezaubernd milden Ton.	何年か前に、分離派の展覧会で展示されたもので うっとりするほど柔らかな色彩を備えていました。
(c)	Ein Frauenbild war's; am weißen Kleide fiel wie eine Augenweide eine breite, schwarze Schleife der Süßen unglaublich behaglich gemalt zu Füßen. Ein niedliches Hütchen bedeckte das Haar, das von, ich weiß nicht, was für Farbe war. Der Rock berührte mit seinem Saum den Boden des Waldes; (d) ich hatte noch <u>kaum</u>	それは女性の絵でした。白いワンピースには 目を楽しませるように 愛らしい女性の幅の広い黒いリボンが 驚くほど心地よく足元まで垂れ下がっていました。 可愛らしいミニハットが髪を覆っていましたが、 それがどんな色だったかはわかりません。 スカートは裾が 森の地面に触れていました。(d) わたしは当時、
(d)	dazumal zu dichten angefangen;	ほとんど詩を作りだそうとしていませんでした。
(b')	Frühling war's; in den Straßen sangen liebe Hauptstadtvöglein, es hörte sich an, als schlürfte man Wein. Durch das Kunstgebäude flanierte eine schicklichermaßen ein bißeben gezierte Menge von Menschen; vor dem Wald sammelten sich viele gar bald, der traumhaft zart zu lächeln, grüßen schien; sie flüsterten: «Wir lieben ihn.» Ins reizend bewegte Sonntagsgedränge sandte das Bild harmonische Klänge.	春のことでした。通りでは 首都の小鳥たちが歌っていて、 ワインをすすめるかのように聞こえました。 美術館の中をぶらぶらと 礼儀正しく、ほんの少し気取った 人々が歩いていました。森の前には たちまち大勢の人々が集まっていて 森に向かって夢見心地で優美に微笑みかけ、挨拶 をしているようでした。 人々は「彼の絵は好きだなあ」と囁きました。 うっとりとした日曜日の雑踏の中に その絵は調和のとれた響きを送り届けていました
(a')	Wenn's mir doch gelänge, dieser Friedlichkeit, dieser Ruhe, vom Gesicht herunter bis zum Schuhe, passenden Ausdruck jetzt zu verleihn. Wie käme ich mir fein vor, und wie glücklich würd' ich darüber sein!	この平穏さ、この安らぎに 顔から靴に至るまで びったりの表現を今 与えることができるなら。 わたしにとって、どれほど素晴らしいでしょう それによって、どんなに幸せになれるでしょう！

(SW13, 170-171, 詩行間の区切りと下線は全て筆者による)

こうした (a) 語り手の物語状況と、(c) 絵画に関する叙述との接合は、この詩の冒頭部でも予感されている。「活動領域 (Wirkungsfelde)」と「絵画 (Gemälde)」という対韻によって詩人は自らの文筆活動と絵画を対置させている。この表現は、詩人である〈わたし〉の言語による表現手段と絵画という芸術ジャンルの違いを意図したものなのか、頭に思い浮かんだイメージが自分自身の想像力によるものでは

ないことを意識したものかとは定かではないが、この絵画の思い出が「突然」登場することで、語り手の思考とは異なる性質を持つことが示唆されている。

一方で、詩の進行に従って、これらの要素は徐々に統合されていく。「突然 (mit einem Mal)」の思い出は、頭韻の m の響きによって「穏やかな色あい (milden Ton)」に結び付けられ、絵画が詩の一部に組み込まれることになる。この「それは、とある女性の絵だった (Ein Frauenbild war's;)」という一節から始まる再現的な描写では、視覚的要素が強調されている。だが、この絵画を目にしたのが「何年前か前」であるために、細部に関しては不確かな記憶にとどまっている。その結果、(c) の絵画の描写に関する物語状況は、それを正確に思い出すことができないという語り手の意識によって、(a) の語っている語り手の状況へと引き戻されてしまうのである。この詩の語り手は「春のことでした (Frühling war's;)」という先の一節と同形の言い回しを用いることによって、こうして一度は途切れてしまった絵画の記憶を再び呼び戻そうとする。そのために挿入されるのが、(b) の状況、つまり語り手が展覧会を訪れた際の経験である。この時点では、(b) は聴覚的な情景を主とし、(c) と (b) とは異なる感覚的経験であることが示唆されている。

しかし、こうした経験を語るなかで、語り手自身の経験と絵画の描写という関係は変容していく。重要な転機となるのは、この絵画とそれを眺める人々に関する叙述である。「森の前には／たちまち大勢の人々が集まっていて」という記述により、緑の描写は特定の説明を伴わずに「森」と表現される。このことから、現実の木々が美術館にいる人々の前に存在しているかのように描写されている。ここから、絵画と語り手の経験という本来は異なる世界が、詩の中では同じ次元で扱われていることがわかる。

また、この詩では「森に向かって夢見心地で優美に微笑みかけ、挨拶をしているようでした。」と続くように、絵画を囲む状況に関する叙述が展開される。興味深いことに、ここでは絵画自体ではなく、美術展に集まった人々の振る舞いが主題化している。これは、鑑賞者が単に絵画を見るだけでなく、その絵画が持つ穏やかな雰囲気、展示場にいる鑑賞者に影響を与えていることを示唆している。言い換えれば、この部分では絵画の雰囲気が、実際の観客のまなざしを通じて伝えられているのである。このように、(b) の語り手が過去に経験した日曜の午後の穏やかな風景と、(c) ルノアールが描いた絵画の情景が相互に調和する瞬間が描かれている。

これまで見てきたように、ヴァルザーの絵画テキストでは、複数のレベルでの語りの層が示されている。絵画というテーマをきっかけとして、ヴァルザーの思考の場には、絵画そのものの描写やその背景に関する空想、鑑賞時の思い出、そして、語り手自身の現在など、さまざまな経験が投影されている。彼のテキスト

に見られる語りの多層性は、それらを同時に語ろうとすることによって生みだされている。ヴァルザーの絵画テキストは、さまざまなレベルで展開され、広がりを見せる思考を一つの物語として紙にとどめる試みだといえる。

3. 画像的コードとしての絵画

ヴァルザーの文章は、直接絵画を見ながら書かれたものではなく、一度目にした絵画を記憶から呼び戻し、再び語り直すことで認識が変化するプロセスを示している。では、ヴァルザーは記憶の中でどのように絵画を保持しているのか。絵画を文章によって書きとめる際には、視覚的情報の言語的コードへの変換と、その解釈が行われている。このようなプロセスが、ヴァルザーの創造のどの段階で生じるのかを分析することにより、彼の視覚情報の記憶方法とその情報の処理手法を明らかにする。

ヴァルザーの作品には、同時代のモダニズム芸術と共通する知覚様式が見られる。ピクセルの研究によれば、ヴァルザーのベルリン時代の散文からは、20世紀の言語とイメージに関する議論の影響を読み取ることができるが¹⁷、その背景にはニーチェのメディア的な観点からの言語批判があるという。ニーチェは言語の概念を、知覚する主体の世界と知覚される対象の世界を媒介する詩的な伝達プロセスであると説明しつつも、そこにはなんら因果関係はないと主張している¹⁸。このニーチェの言語観が、言語のメディアとしての特質への疑念を引き起こし、言語芸術と絵画芸術の境界を再考する動きへとつながっていったとピクセルはいうのだ。例えば、リルケはセザンヌの絵画に触発されて「新しい視覚」の概念を発展させたが、ヴァルザーもモダニズム絵画との関わりのなかで「新しい視覚」を「新しい執筆」へと変換し、絵画的で視覚的な表現手段を用いて執筆の側面を探求する実験を行ったとピクセルは指摘している¹⁹。

ピクセルによれば、ヴァルザーは同時代の言語とイメージの言説について「暗

¹⁷ Bichsel, Beat: *Augen-Blicke des Schreibens. Zur Poetik des Visuellen in der Schreibszene Robert Walsers*. Basel: Schwabe Verlag, 2020, S. 15.

¹⁸ ニーチェは、「道徳外の意味における心理と虚偽について」で、言語による対象の表現プロセスについて詳しく論じている。それによれば、このプロセスでは大胆な隠喩が用いられ、まず神経刺激がイメージ (Bild) へと転換され、そしてそのイメージが音へと転換されると説明している。この転換過程は論理的に進むのではなく、各領域間で飛躍が生じると述べている。Nietzsche, Friedrich: *Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne*. In: ders.: *Die Geburt der Tragödie, Unzeitgemäße Betrachtungen I-IV, Nachgelassene Schriften 1870-1873, Kritische Studienausgabe* 1. München, Berlin: Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1988, S. 873-890.

¹⁹ Bichsel, Ebcl., S.20

黙のうちに」触れているに過ぎず²⁰、彼がそうした議論に明確に言及しているわけではない。ヴァルザーの同時代の芸術観は、皮肉を含んだ曖昧な表現で示され、一見すると現代芸術から距離を置いているようにも見える。例えば、主として古典絵画を取り上げた散文「ベルギーの美術展」では、現代美術に言及した一節が含まれている。

17世紀の風景画についていえば、最近の画家たちはサロンのことを考えていないのです。彼らは緑をわれわれの部屋へと持ち込んでいます、それらは、確かに自然らしくはあるのですが、不躰なものをそれ自体備えているものなのです。かつての画家たちは風景の色調を教養の求めることにしたがってふさわしいやり方で調整しました。[...] こう言ったからといって、最近の絵に反対意見を言っているわけではありません。わたしは単に、違いを描き出そうと試みているだけなのです。(SW 18, 250)

この箇所では、伝統的な美術と現代芸術との比較から、表現主義を念頭に置いた色調のアプローチを「不躰なもの」として批判しているようにも受け取れる。ただし、この散文の語り手は、後に「違いを描き出そうと試みているだけなの」だと釈明することによって、自分の立場を曖昧にしている。

しかし、ヴァルザーは同時代の芸術についての明確な評価は避けているものの、そのテキストの構造や表現からはモダニズム的な特徴や影響が明らかになる。本章では、同時代の潮流に影響を与えた代表的な芸術家であり、ヴァルザーが度々言及しているファン・ゴッホに関するテキストを取り上げる。

3.1. ヴァルザーのゴッホ受容

ヴァルザーのゴッホの作品への関わりには、ベルリン分離派の影響が色濃く表れている。ヴァルザーがベルリンを訪れた時期と、ゴッホの作品が初めてドイツに紹介された時期は重なっている。具体的には、1901年のパウル・カッシーラによる第3回分離派展で、ゴッホの絵画が6点展示され、これは当時のドイツにおける初の比較的大規模なゴッホの展示となった。ヴァルザーもこの年と1912年のベルリン分離派展でゴッホの絵画を目にし、それらに触発されて作品を執筆している²¹。

²⁰ Ebd., S.15.

²¹ Echte, 2006, S.107.

当時、文学においては、ゴッホは表現主義の若手作家たちの中で人気を博していた。特に注目されたのは、ゴッホの芸術に身を捧げた悲劇的人生、描く対象を通じた自己の内面の表現、そしてそのために用いられた色彩の極端な誇張や強調であった²²。こうした同時代の評価は、ヴァルザーのゴッホに対する考えにも少なからず影響を与えている。

例えば、1927年9月から10月にかけてベルンのクンスト・ハレで開催されたゴッホ展をきっかけに、ヴァルザーは詩「ファン・ゴッホ」(Van Gogh, 1933)を執筆した。この詩はゴッホの絵画『刑務所の中庭』について書かれたものではあるが、絵画そのものについてはそれほど言及されていない。ヴァルザーが注目しているのは、むしろ、ゴッホの芸術への姿勢である。この語り手は、ゴッホの絵画と自らの好みとの不一致を率直に示しつつも、同時にゴッホの芸術への献身に深い感銘を抱いていることを語っている。

哀れな男よ

この男がわたしを夢中にさせることなどない。

彼の粗雑で荒々しいパレットを目前にすると

わたしの中で、ばらばらになってしまうのだ 人生に対する

甘い考えなど。

Der arme Mann

es mir nun mal nicht antun kann.

Vor seiner gröblichen Palette

zerstreut in mir sich jede nette

Aussicht ins Leben. [...] (SW13, 143)

ヴァルザーがゴッホについて語るとき、ゴッホへの両義的な感情が常に示されている²³。この詩では、語り手は、一旦、自分の趣味には合わないものとしてゴッホの作品について言及している。ここで語り手の念頭にあるのは、伝統的な絵画との比

²² Bridgwater, Patrick: *The Expressionist Generation and Van Gogh*. Hull University: New German Texts & Monographs, Vol. 8, 1987, S. 10-11.

²³ エヴァンスは、ヴァルザーのゴッホ批評における曖昧な態度もまた政治的な振る舞いを意識したものだとして指摘している。1911年に、ゴッホの絵画購入に対して、国内の画家を優先すべきではないかという論争が起きており、ヴァルザーはその翌年に『芸術と芸術家』誌上で散文「アルルの女について」(Zu der Arlesierin von van Gogh, SW15, 66-68)を発表している。ヴァルザー文体は当時の分離派の批評スタイル(形式や美的芸術鑑賞、学術的見解)とは異なるものの、自身に合うものを肯定する方法で分離派側に参加したとエヴァンスは結論づけている。Evans, 2008, S. 107-116.

較である。語り手にとって、絵画というものは「優しい妖精から優しく愛撫されているような心地」(SW13, 143) になるものであり、こうした前提からすればゴッホの作品は極めて異質なものとして受け止められている。別の散文でも、ゴッホの『アルルの女』のモデルとの比較として、古典的絵画が引き合いに出されている。

「華麗な女性たちは」、とわたしはつぶやいた、「ティツィアーノやルーベンスやルーカス・クラナハによって描かれたのだ」と。(SW 16, 345)

これらの記述からわかるように、伝統的な絵画として、優雅で理想化された美を表現したものが想定されている。しかし、ゴッホの作品を鑑賞する際には、そうした語り手のイメージは打ち碎かれる。

[...] なんと、冷淡に冷たい色彩で
彼は全身全霊をかけた作品を描いたことだろう！
[...] Ach, wie kalt
hat er sein Lebenswerk gemalt! (SW13, 143)

ゴッホの絵画と直面すると、ヴァルザーの感情は一変する。ゴッホの極端に誇張された荒々しい色彩に触れ、彼は自身の人生や美的価値観に対する甘い幻想が崩れ去る瞬間を経験する。彼が感じた圧倒的な印象は、伝統的美的観念とは衝突するものであった。

こうしたゴッホの理解については、同時代のゴッホをめぐる言説とも共通点が見受けられる。1901年の『芸術と芸術家』誌に掲載された表現主義展に関する批評では、ゴッホの作品が「それは色彩におけるパレット芸術である (Palettenkunst)」²⁴と形容されており、ゴッホの原色を多用した鮮やかな色彩が「パレット」という比喩で強調されている。したがって、ヴァルザーの詩で用いられている、「彼の粗雑で荒々しいパレット」という表現も、このような同時代の芸術評論の言説に影響を受けたものだと考えられる。

また、1904年以降、同誌上でゴッホの弟宛ての書簡の翻訳が掲載され、1914年にはその完全版の書簡集²⁵が出版されている。ヴァルザーの詩で触れられてい

²⁴ Heilbut, Emil: Die Impressionistenausstellung der Wiener Secession. In: *Kunst und Künstler* 1 (1902-1903), S.193. (最終閲覧日: 2023年10月6日) <https://doi.org/10.11588/diglit.3547#0201>

²⁵ Gogh, Vincent van: *Briefe. Deutsche Ausgabe besorgt von M. Mauthner*. Berlin: Verlag von Bruno Cassirer, o.J.

るゴッホの生涯に関する記述は、おそらくこれらのゴッホの書簡集を元に行っている。ゴッホ自身が作品に対して厳しい自己評価を下していたことが、ヴァルザーの詩では次のように表されている。

しかし、見る者は目を伏せてしまう
 これほどまでに画家が自分を自虐的に苦しめる激しさを前にすれば
 しかも、それがあまり満足のいかない作品なのだ
 Doch senkt man bald die Augenlider
 vor so selbstquälerischer Stärke
 in doch nur halbbefriedigendem Werke. (SW13, 143)

この詩の「あまり満足のいかない」という表現は、ゴッホの自身の作品に対する評価を指している。ゴッホは書簡の中で、「まるで、すでに自分の仕事に満足している (zufrieden wäre) ように見える。しかし、まったく逆だ」²⁶というように、自身の創作活動に対して高い要求を抱いていたことを明らかにしている。ヴァルザーは「半分しか満足していない (halbbefriedigen)」という語を使うことで、ゴッホの書簡で度々言及される「満足 (zufrieden)」に対する意識を反映している。このように、ヴァルザーのゴッホ受容は同時代の批評やゴッホの書簡の言説を前提としていることがわかる。

とはいえ、先にも述べた通り、ヴァルザーのゴッホ評価は両義的である。先の詩「ファン・ゴッホ」のすぐ後に書かれた、ブラハ新聞の編集者オットー・ピック宛ての書簡（1927年10月5日）の中で、創作者としての視点から言及している。

私は彼 [ファン・ゴッホ] についての詩を書きましたが、その中で私は、反感と同時に感銘を与えるような、壮大であると同時に痛々しさのあるこの男の性格を描こうとしました。ここベルンでは現在、ものすごい力をもつこの画家の名前を冠した展覧会が開催されています。たまに、つまり時々、私は破れた原稿をゴミ箱に捨てます。本能的に、常に何かを犠牲にし、それによって創作活動をほどほどに留めたりしておくのは、気品があり、優美で、清楚で、高貴なことだと思っているからです。(Br. 311)

²⁶ Gogh, Vincent van: Aus der Correspondenz Vincent van Goghs, [1]. In: *Kunst und Künstler* 2 (1904), S. 366. (最終閲覧日: 2023年10月6日) <https://doi.org/10.11588/diglit.3550#0365>

この「創作活動をほどほどに留め」という発言には、ヴァルザーの自身の散文小品を数多く執筆する創作スタイルが示唆されている。もちろん、寄稿先の編集者宛ての手紙である文脈を考慮すると、この発言には謙遜の要素も含まれている可能性はある。だが、それを差し引いても、この発言を通じて、ヴァルザーの創作姿勢は激しい情熱と犠牲を払うゴッホの姿勢とは対照的であることが示唆されている。

このことから、ヴァルザーによるゴッホへの評価の曖昧さは、ゴッホの芸術に抱く深い敬意と彼の創作活動における独自の視点の対立によって生じていることがわかる。ヴァルザーは同時代のゴッホブームを踏まえつつ、自己破壊的な芸術観を賛美するようなゴッホ受容は批判的に捉えていた。このように、ヴァルザーは悲劇的ヒロイズムを賛美することから距離を置き、自身の創作に関しては「ほどほど」とどめておくという姿勢を持っていたことがわかる。

3.2. 観察から創造へ

では、ゴッホを含む絵画の鑑賞が、ヴァルザーの認識にどのような影響を及ぼしたのか。ヴァルザーは日常の風景や人物を素材にし、自宅でその記憶を文章に移し替える方法で創作を行っていた。このプロセスは認識、記憶、想起を経ている。知覚した情報を取り入れる段階では、何が起きているのか。そして、それが彼の創造性にどのように影響しているのか。

(1) 記憶の取り込み

1916年に書かれたヴァルザーの短編小説「ハンス」(Hans) では、主人公の画家が風景を眺めて感嘆にふける場面が描かれている。ここでは、ルノアール、セザンヌ、ゴッホといった、同時代の芸術家たちの物の見方をなぞり、風景を観察する様子が描写されている。

「僕はこんなに喜んでいいのだろうか」美しい景色、心地良い感覚、豊かな感情などによって、特に喜びを感じる時、彼はしばしば、こう自問自答したものだ。時おり、世界は彼にとって、名状し難いほど善良で、暖かく、明るく見えることがあった。ある風景や建物、そのほか、何らかの自然の美しさを前にすると、まるで、一目で色調や輪郭を自分の空想の中で描き出す画家のように、じっと立ち止まってしまうのが常だった。彼が見るのを好んだものは、彼にセザンヌの奇妙な絵を思わせた。またある時、彼の脳裏に華やかな画家ルノアールがよぎった。うねった黄色い穀物畑で、

暑い夏の至福の風が吹き抜けながら、茎と優雅に戯れているのを見たときには、そういったものを、おそらくはぞっとすると言っていいほどの愛情のこもった熱意をもって描いたゴッホを思い浮かべずにはいられなかった。(SW7, 190-191)

ここでは、主人公の知覚として、伝統的な写実的作風の画家ではなく同時代の画家が引き合いに出されている。例えば、ゴッホに着目すれば、特に「一目で色調や輪郭を自分の空想の中で描き出す (beim Anschauen in seiner Phantasie entwirft) 画家のように」という表現は、ゴッホの手紙に見られる「いつも自分の頭の中に浮かんでいる絵 (was mir schon immer vorgeschwebt hat) を描いてみた」²⁷という一節や、同時代のゴッホ批評の一節にある「ゴッホの絵はファンタジーに近い」²⁸という言葉と共通している。つまり、主人公の認識過程を描写する際に、同時代の芸術家や批評を基にしている。特に注目すべきは、風景が現実的ではなく、知覚の段階ですでに空想的な絵画として認識されている点である。ここでは、写実主義からの逸脱と抽象的で空想的な要素の導入が肯定的に受け入れられている。

こうした知覚のあり方は、ヴァルザー自身の創作にも深く関わっている。つまり、現実の風景や人物を記憶し、それらを創作に活用する過程で、対象は観察段階で現実からフィクショナルな絵画へと変化している。前章で見たヴァルザーの絵画テキストにおける描写の不正確さも、絵画の観察中に彼の空想が入り込み、彼の記憶にはオリジナルとは異なる独自の絵画が刻まれることで生じたものといえる。このような主観的な側面が、ヴァルザーの作品の独自性を形成している。

(2) 記憶の再構成

ヴァルザーが対象を記憶する際の知覚のあり方を検討してきたが、彼は記憶をどのように想起し、創作に利用しているのか。ゴッホの『アルルの女』(Van Gogh, *L'Arlésienne*, 1888) に関する二つのテキストからは、ヴァルザーの記憶の変化が読み取れる。

この絵画を、ヴァルザーは1912年の分離派展で目にし、その後同じ年と1927年にそれぞれ「アルルの女について」(Zu der Arlesierin von van Gogh) と「ファン・ゴッホの絵」(Das Van Gogh-Bild) というテキストを書いている。こ

²⁷ Gogh, 1904, S.365.

²⁸ Heilbut, Ebd

これらの文章は、15年の間隔を置いて書かれており、後者のテキストの語り手は冒頭と末尾で、以前とは異なる見方をするようになったと述べている。

わたしには、その絵がいうまでもなく力強い作品であるように感じられたのですが、実をいうとわたしは当初、この絵を表面的に観察して分かった気になっただけだったのです、できるだけ早く次へ行って、別の対象を吟味したかったからです、[...] (SW16, 344)

この絵をじっくりと心に刻み込んだ後、わたしは家に帰り、これについての論説を雑誌「芸術と芸術家」に書きました。論説の内容は忘れてしまいました、そういうわけで、わたしはこの論説を新たに書き直すことを望み、ここに書き記すことになったわけです。(SW16, 347)

語り手は、初めてゴッホの『アルルの女』を鑑賞した際には、表面的な理解にとどまっていたが、その後の時間の経過とともに、彼の解釈に変化が生じたことを認めている。1912年のテキストでは、絵画を謎めいた存在として扱い、その後1927年のテキストでは、すぐに他の絵画に興味が移ってしまったことが語られている。

共通点として、両散文ともに、語り手はこの絵画をはじめから気に入っているわけではないものの、「この絵を前にすると、さまざまなことを考えてしまうものです」(SW15, 66) や「しかし特別な何かが、わたしの腕のあたりをつかんだかのようにした」(SW16, 344) というように、語り手はこの絵が内包している、伝統的な美的要素とは異なる何かに引き寄せられていると感じている。その魅力は、語り手がこの絵画から読み取っている物語にある。両散文ともに、語り手はその絵画から独自の物語を読み取っている。絵画が描かれる前後の時間や画家とモデルの女性との交流が空想され、豊かなストーリーとして描かれている。つまり、これらの散文では、絵画は単なる静止したイメージではなく、その制作過程や周囲の出来事とともに、時間を切り取ったものとして語られている。したがって、語り手がこの絵画に対して抱く特別な魅力は、美的要素ではなく、それが持つ物語性から来るものだとわかる。

この物語性という点に関して、両散文では語り手の着眼点が異なっている。1912年の散文では、語り手は画家の視点から絵画が描かれた瞬間の情景を空想している。彼は画家の過酷な人生を想像し、そのなかで「忍耐強い画家 (der Maler-Dulder)」が「忍耐強い女性の描写 (die Darstellung der Dulderin)」

(SW15, 67) へとたどり着く様子を追体験している。また、「女性という姿で表された人生という残酷な謎を描いた絵画」(SW15, 67) と表現されているように、この散文ではこの女性があくまで苦勞の多い人生の象徴としての存在として扱われていることが読み取れる。このように、語り手はどこにでもいるような庶民の女性が絵のモデルとして選ばれた意図を探るなかで、この女性の姿に画家の苦難に満ちた生涯が投影されているのだと強調している。

1927年の散文では、物語の主眼はモデルの女性の人生へと移行している。語り手はモデルの年齢を注意深く観察し、顔に刻まれた皺から彼女が歩んできた生涯を丹念に空想している。この過程で、語り手は絵画に閉じ込められた時間の流れを読み取り、テキストを通じてそれを再現していく。注目すべきは、語り手が情報を読み取る際に、女性の身体が一種のメディアとして機能しているという点である。生真面目な表情、どこにでもあるような上着や手、慎ましやかなりボンなどの要素から、語り手は彼女の人生を想像するための手がかりを得ている。それによって、はじめの散文では漠然と苦勞の多いものとされていた女性の人生が、後の散文ではより具体的なものとして描かれている。絵に描かれた女性が自ら口を開いて、子ども時代から現在に至るまでの思い出を語る場面は、彼女が単なる絵ではなく、さまざまな経験を経てきた実在の人物として浮かび上がる瞬間である。

ここには、ひとりの人間のありのままの姿が、そして、長い間、あらゆる感情を静かに自分の胸にしまっておくことに慣れなければならなかった様子が写し取られています。そうこうしているうちに、我慢し、脇に置き、克服しなければならなかったあらゆる出来事のうちの半分は、もう忘れてしまったのかもしれませんが。(SW15, 67)

ファン・ゴッホの絵画は、真摯な物語であるかのような印象をわたしに与えました。その女性は突然、彼女自身の人生を語りはじめました。昔、彼女は子どもで、学校に通っていました。毎日、両親に会って、先生たちからさまざまな知識を授けられるというのは、なんと素敵なことでしょう。[...] 彼女には恋人がいたことや、喜んだり、たくさんの心配事を経験したりしたことがなかったのでしょうか？ 彼女は鐘の音に耳を傾け、目で花咲く枝々の美しさを知覚したのでした。月日が彼女のそばを過ぎていきました、夏が去り、冬が去りました。単純なことではありませんか。彼女の人生は苦勞の多いものでした。(SW16, 345-346)

二つの散文は、同じ絵画から読み取られる時間の層が異なっている。最初の散文では、語り手の関心はゴッホがモデルの女性を描いた瞬間にとどまり、この女性の人生は単なる苦労と困難の連続として扱われている。これに対し、後者の散文では、時おり語り手の主観や判断をさしはさみつつ、この女性の視点を追体験するように、彼女が目にした風景や感覚を想像していく。こうして、この女性が歩んできた人生をたどっていくなかで、最終的に画家と女性が交流し、この絵が描かれた瞬間に至るまでが描かれている。このように、二つ目の散文では女性の人生について、より深い解釈を示しており、この絵画の背後にある時間の流れを感じさせるものとなっている。したがって、語り手がこの散文で「当初、表面的に観察して分かった気になったただけだった」(SW16, 344)と述べているのは、ゴッホの悲劇的な人生に引きずられて、女性の人生について十分に理解できていなかったことへの反省ともいえるだろう。このように、同じ絵画を語り直すことによって、絵画が持つ多層的な要素を読み取ることが可能となっている。

17年前にベルリンで会ってお茶を飲んだ元大臣のお嬢さんたちが、久しぶりに私に手紙をくれました、感動的な美しい文章を書いてくれて、それは、太古の時代の水の精のように、魅惑的な庭園の池から浮かび上がってきたかのように、まるでおとぎ話のように感じられました。そのような出来事は、まさに過ぎ去った時間の中に眠っていたものでした。幽霊の群れを——おそらく、今なお美しい彼女たちはこう書いています——呼び覚ましたのです、と。見てください、ピックさん、私も幽霊を呼び覚ましているのです、例えば、恐ろしい魔術師であるファン・ゴッホを […] (Br. 311)

ここで、ヴァルザーがゴッホについて言及したオットー・ピック宛ての手紙に立ち戻れば、過去の出来事を語るという行為について、池の中で眠っていた幽霊を呼び覚ますという比喩が用いられていることに気づく。この表現は、まさにゴッホの絵画について語ることも同列に捉えられている。絵画は過去の出来事や経験を凍結させたもののように見えるが、それを再び語り直すことによって、その中に眠っていた過去を目覚めさせ、新しい経験へと昇華させているのだと暗に示している。

以上のように、ヴァルザーにとって、絵画は単なる視覚的な情報だけでなく、時間と経験の複雑な層を内包するものとして理解されるべきである。絵画を鑑賞する者は描かれた対象の過去や周囲の環境、感情などを想像することによって、オリジナルの絵画の枠を超え、生き生きとした情景を心に描くことができる。こ

うした方法により、単なる静止画を越え、多層的な経験が込められた作品となるのである。したがって、絵画はヴァルザーにとって、豊かな歴史や物語を語りかける媒体として、新たな解釈を呼び覚ますものといえるだろう。

おわりに

本稿では、ヴァルザーが絵画に焦点を当てたテキストを通じて、その視覚メディアとしての特質が彼の語りに与えた影響を検討してきた。絵画テキストにおける描写の不正確性や語り手の介入という要素は、記憶の中の絵画を思い出すという行為に起因している。つまり、描写の不正確さは実物の絵画ではなく、記憶という曖昧さを含んだものをもとにして書かれたものであり、また、頻繁に起こる脱線は、想起するという行為のなかで、語っている自分という存在への意識が向けられ、語り手が前景化することによるものである。そして、絵画と語り手という異なる存在が、テキストを語る行為を通じて組み込まれていく。つまり、語り手の経験や、そして語っている現在という異なる時間層が、語るという行為の進行に伴い交わり、その境界は曖昧になり、統合されていくのである。

こうしたヴァルザーの思考方法には、一定の程度、同時代の芸術との関連性が見られる。例えば、ヴァルザーは、悲劇的なヒロイズムの称賛からは距離を置きつつも、観察する際に、対象を想像上の絵として捉えるというゴッホの認識方法を取り入れている。そのため、観察対象は認識の段階で空想上の独自性を備えた像として取り込まれることになる。そして、同じ絵画について繰り返し語ることによって、絵画から読み取られる時間の層はより深まっていく。このような手法において、過去の出来事を語ることと絵画について文章を書くことは同等に扱われ、幽霊を呼び覚ますという比喩に表されるように、眠っていた過去が現れて新たな創造へと変化するプロセスが描き出されている。

ヴァルザーの絵画テキストは、絵画を起点として想起と空想が織り交ぜられたものであり、同じ絵画であっても語り直すたびに異なる層の時間が前景化する。さらに、このように絵画を語るという場面すらも、一つのエピソードとして別の作品の創造へとつながっていく。したがって、ヴァルザーの語り的手法は、さまざまな対象を観察し、空想上の絵画として記憶し、その後、何度も語り直すことを繰り返すなかで、その複数の時間の層を積み重ねていくものといえるだろう。

ゲーテの『ファウスト』における *durch*-動詞 分離・非分離に律動が与える影響について¹

Die *durch*-Verben bei Goethes „Faust“
Über den rhythmischen Einfluss auf die (Un)trennbarkeit

佐藤 宙洋

東京外国語大学大学院特別研究員

Takahiro SATO

Tokyo University of Foreign Studies, Research Fellow

Abstract

In diesem Beitrag geht es um einen rhythmischen Einfluss auf die (Un)trennbarkeit von *durch*-Verben. Dass der Rhythmus Einfluss auf die Wahl zwischen trennbar und untrennbar bei *durch*-Verben nehmen kann, wird in der bisherigen Forschung wenig beachtet. Aber wie in Paul (2002: 237) beschrieben ist, ist es vor allem in Dichtung ziemlich oft zu beobachten, dass aus einem rhythmischen Grund ein trennbares *durch*-Verb verwendet wird, obwohl das Akkusativobjekt eigentlich als von *durch* abhängig zu betrachten ist und deshalb das untrennbare grammatisch richtiger wäre (Z. B. „er fliegt die Schrift durch“ müsste eigentlich „er durchfliegt die Schrift“ sein, weil „die Schrift durchfliegen“ auf die Konstruktion „durch die Schrift fliegen“ zurückzuführen ist) .

Die erste Forschungsfrage dieses Beitrags heißt also: „Wie oft ist diese Erscheinung zu beobachten? Und die zweite ist: „Gibt es vielleicht umgekehrt auch Fälle, in denen aus demselben Grund ein untrennbares *durch*-Verb vorkommt, obwohl das Akkusativobjekt eigentlich nicht als von *durch* abhängig zu betrachten ist und deshalb das trennbare grammatisch richtiger wäre?“

Um diese zwei Fragen zu beantworten, habe ich die *durch*-Verben in Goethes „Faust“ untersucht. In diesem Werk kommen *durch*-Verben insgesamt 48 Mal vor (getrennt: 14 Mal; ungetrennt: 32 Mal; zweideutig: zweimal) . Als Ergebnis konnte festgestellt werden, dass das in Paul (2002: 237) beschriebene Phänomen in „Faust“ zweimal (d.h. etwa 6 %) vorkommt, und dass es aber auch einen Fall gibt, wo ein eigentlich trennbares *durch*-Verb aus metrischen Gründen so verwendet wird, als wäre es untrennbar.

Ob es auch in anderen Werken zu gleichen Ergebnissen kommt, muss noch untersucht werden, aber diese Ergebnisse zeigen schon die Wichtigkeit, auch rhythmische Einflüsse auf die (Un-) trennbarkeit zu beachten.



1. はじめに

ドイツ語の分離・非分離動詞, その中でも特に分離・非分離の *durch-* 動詞に関しては, 分離可の場合 (= 不変化詞動詞の場合) と分離不可の場合 (= 接頭辞動詞の場合) でいかなる内容的な差異があるかという観点で, 多くの論述と記述がなされてきた。したがってまずは, この点に関する主だった知見を, 以下3つに大別し極く簡潔に紹介しておきたい。²

第1に, (1) のように分離可の場合 *durch-* は副詞的であり, (2) のように分離不可の場合 *durch-* は前置詞的ないし前置詞由来であるという見解が, 少なくとも Kjellman (1945: 23) 以来明確なかたちで多数の文献 (日本語で書かれた論文だと例えば, 橋本 1961, 成田 2003) において提示されている。³ なお, こうした差異は, *durch-* 以外の前つづりを持つ分離・非分離動詞に関しても多くの場合で当てはまることが知られている。

(1) a. *er läuft durch (hindurch) , das Licht schimmert durch* (Kjellman 1945: 23)

彼は駆け抜け (てい) る ([駆けて] そこ [= 特定の場所] を通 (っ) てい) る, 光が [そこを] 通って] かすかにもれ (てい) る

b. *sie zieht den Faden durch, er führt seinen Plan durch.* (ebd.)

彼女は糸を [そこに] |通す/通している|, 彼は自分の計画を |遂行する/遂行している| [原義は, 導いてそこを通す]

(2) a. *er durchbläuft den Wald = er läuft durch den Wald* (ebd.)

彼はその森を駆け抜ける = 彼はその森を通過して駆け (てい) る

b. *er durchwachte die Nacht = veraltet sie wachte durch die Nacht* (ebd.)

彼はその夜を眠らずに過ごした = (古風) 彼はその夜を通して起きていた

第2に, *durch-* 動詞をはじめとする *um-* 動詞以外の複合動詞は, 傾向として, 分離可の場合は原義的・具体的であり, 分離不可の場合は比喩的・抽象的である

¹ 個々言及することは基本的に割愛せざるを得なかったが, 本稿は匿名の査読者2名から多くの有益な指摘を得ている。また Abstract に関しては, 作成途中において1度, 東京外国語大学のクリストフ・ヘンドリックス特任准教授に添削を受けた。さらに, 東京外国語大学大学院特別研究員の木村千恵氏には, 韻律等に関する筆者の多数の質問にご返答いただいた。ここに記し謝意を表したい。

² より詳しい紹介は佐藤 (2023) の 1.3.3 と 2.2 を参照されたい。

³ 以下, ドイツ語の引用文には, 特に断りのない場合に限り拙訳を付す。また, 引用に際して補足がある場合は [] ないし [] で表示する (なお, 同記号が原文にある場合はその旨を記す)。

ことが知られている。なお、こうした見解には、少なくとも Henzen (1947: 92f.) 以来多くの批判もあるが、(3) の非分離動詞 durchbohren の場合のように、特定の場合においてはやはり有効と考えられる。

- (3) Die untrennbaren Verben werden oft übertragen gebraucht: er hat mich mit Blicken durchbohrt. (Duden 2018: 294) 非分離の durch- 動詞は、しばしば比喩的に用いられる。er hat mich mit Blicken durchbohrt [彼は私を視線で貫いた]。

第3に、特定の durch- 動詞においては、分離可の場合と分離不可の場合で過程性ないし結果性に関する差異のあることが知られている。

- (4) [...] wenn betont, dann trennbar, wenn unbetont, dann untrennbar; oft bestehen beide Möglichkeiten nebeneinander, wobei die trennbaren Verben stärker die Tätigkeit o. Ä. der Person hervorheben, während die untrennbaren stärker die Tätigkeit am Objekt, das Ergebnis betonen, z. B. ich bohre das Brett durch (= ich bin bohrend tätig), ich durchbohre das Brett (= das Brett erhält durch mein Bohren ein Loch). (Duden 2018: 294)

強勢が置かれると分離し、置かれないと分離しない。ふたつの可能性が並存することが多い。その際、分離可能動詞は、人物の活動等をより強く際立たせ、他方非分離動詞は対象への作用、すなわち結果を強調する。例えば「私はその板に穴を空けている (ich bohre das Brett durch)」(=掘削活動に従事している)、「私はその板を掘り通す (ich durchbohre das Brett)」(=その板は私の掘削によって穴が開く)。

なお、こうした見解は、文献によって内実に多少のヴァリエーションはあるものの、少なくとも Streitberg (1895: 81) にまで遡ることができる。

分離・非分離の場合における内容的差異の概観は以上とし、次に、文体や律動 (Rhythmus) の影響を指摘し、分離・非分離の場合で意味の差が見出し難い場合を認めている Paul (2002: 237) を引用する。

- (5) Eine nahe Berührung zwischen den festen und den trennbaren Verbindungen findet dann statt, wenn ein Obj[ekt] zugleich als

abhängig von dem Verb an sich und von *d{urch}* gedacht werden kann. So stehen z.B. nebeneinander *durchschnéiden* – *dúrchschneiden*, entspr[echend] *durchbauen*, *-záhlen*, *-wármén*. Auch Verbindungen von intr[ansitiven] Verben berühren sich, z.B. *durchgében* – *dúrchgeben*, entspr[echend] *durchdenken*. Indem die leise Verschiedenheit der Bed[eutung] nicht mehr festgehalten wird (vgl. z.B. *wenn Sie sie vorher noch ein wenig durchgedacht haben* Le[ssing]), entsteht Unsicherheit des Sprachgefühls. So kommt es, daß recht häufig die trennbare Verbindung aus stilistischen, rhythmischen Gründen angewendet wird, wo die feste Zus[ammensetzung] grammatisch richtiger wäre (Paul 2002: 237)

非分離動詞と分離動詞で近接が生じるのは、目的語が動詞自体に依存しているとも、*durch* に依存しているとも考えられる場合である。例えば、*durchschnéiden* – *dúrchschneiden* [2つに切り分ける] の場合であり、同様のことは *durchhauen* [2つに断ち切る], *durchzáhlen* [数え切る], *durchwármén* [暖め切る] にも当てはまる。自動詞と結びつく場合でも意味が近接する場合がある。例えば *durchgében* – *dúrchgehen* [通り抜ける] の場合であり、同様のことは *durchdenken* [考え抜く, 熟考する] にも当てはまる。意味のわずかな差異がもはや保持されないことによって (例えば次を参照: *wenn Sie sie vorher noch ein wenig durchgedacht haben* [あなたがそれを前もって少し熟考していたなら], レッシング), 語感の不安定さが生じる。そうして、非分離動詞が文法的により正しいような箇所、文体的、律動的な要因から、分離動詞が用いられることがかなり頻繁に生じる。

(5) で言われている「文体的、律動的な要因」については、既に紹介した他の3つの観点に比べると、これまであまり注目されてこなかったように思われる。⁴ しかし、分離・非分離の選択に、当該要因が関与し得ることは十分考えられるので、本稿はこの観点に着目して考察を行う。

2. Paul (2002: 237) の検討と問題提起

本章では、まず Paul (2002: 237) のより詳しい検討を行い、次に本稿が扱う

⁴ なかでも特に韻律的な要因は注目されることが少なかったと思われる。なお、文体的な要因を指摘する文献としては、Eroms (1982) や Šimečková (1995: 198) が挙げられる。

問題を提起する。

既に引用した (5) の要点は、「非分離動詞が文法 [ないし造語論] 的により正しいような箇所、文体的、律動的な要因から、分離動詞が用いられることがかなり頻繁に生じる」という一文にあると考えられる。Paul (2002: 237) は、引用 (5) の前の箇所で「非分離動詞は常に対格を支配するが、その対格は元はどの場合でも durch に依存し、したがって当該活動が通り抜ける対象を表す (Die festen Zus[ammensetzungen] regieren stets einen Ak[kusativ], welcher eigentl[ich] immer von *d[urch]* abhängig ist, demnach den Gegenstand angibt, durch welchen die Tätigkeit hindurchgeht (räumlich oder zeitlich))」と述べていることから、⁵ (5) の要点はさらに「4格 (= 対格) 目的語が元は durch に依存するにもかかわらず、文体的、律動的な要因から、非分離動詞ではなく分離動詞が用いられることがかなり頻繁に生じる」と言い表すことができる。

Paul (2002: 237) は (5) に続いて、次に挙げる14の文例を挙げているが、記述の流れからは、当該現象の例示が意図されていると推察される。以下、そのことを確かめるため、及び「文体的、律動的な要因」ということで何が意図されているかを探るために、一例ずつ引用し考察する (なお、以下同様であるが、引用に際して略記は復元し、durch- 動詞を太字にする)。⁶

(6) er **fliegt** die Schrift **durch** (Schiller) 彼はその文書にざっと目を通す

fliegen は自動詞であるから、4格目的語 die Schrift は元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch die Schrift fliegen)。よってこの例は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケースと言える。

(7) die Sonne hat uns **durchgeglüht** (Goethe) 太陽が私たちが十分温めた

glühen は、「～を真っ赤に焼く」という意味の他動詞としても「赤熱する」とい

⁵ durchbacken 「(パンなどを) 具を入れて焼く」のように、非分離動詞ではあるが、能動文において4格目的語にあたる項が元は durch に依存すると見なし難い例もないわけではない。本稿は、そうしたケースはあくまで例外と理解して論を進める。

⁶ 本来であれば Paul (2002: 237) の全ての文例に関して引用元の原文にあたることが望ましいが、今回は時間の制約により、考察にあたって文脈の参照が不可欠と思われる場合にのみ原文を推定し、それに言及している。また、和訳に関しても本来であれば翻訳書を参照することが望ましいが、今回は同じ理由により、拙訳を付すのみとなっている。

う意味の自動詞としても用いられるが、4格目的語の *uns* は、元々 *durch* に依存するとは見なし難いので (??*durch uns glühen*)、むしろ元は他動詞 *glühen* に依存すると考えられる。そうだとすれば、(7) は少なくとも (5) の現象の例示とは見なし難い。

(8) *die süß verträumten Stunden, die durchgeküßten* (Goethe) 甘い夢のような時間, キスして過ごされた時間

(8) は、Goethe の „Das Glück, an Annetten“ の7-8行目「Sie sind, die süß verträumten Stunden, / Die durchgeküßten sind verschwunden」(それらは、甘い夢のような時間, キスして過ごされた時間は消え去った) からの引用と推定される。⁷ そうだとすれば、当該箇所に対応する能動文を考えた際の *durchküssen* の4格目的語にあたるのは *die Stunden* ということになる。

küssen は通常他動詞であるが、*die Stunden* は *küssen* という行為の対象ではないので、ここでは自動詞の *küssen* が問題と考えられる。そうすると *die Stunden* には、*durch* (前置詞) に依存する (< *durch die Stunden küssen*) という解釈が成り立つ。とはいえ *die Stunden durch küssen* (*küssen* の結果 *die Stunden sind durch* という状態になる) という結果構文における4格目的語であるという解釈もまた成り立つので、(8) は (5) の現象の例示とは言い切れない。

(9) *er lief die Bekanntschaften durch* (Goethe) 彼は知り合いに思いをめぐらせた⁸

laufen は自動詞であるから、4格目的語 *die Bekanntschaften* は元は *durch* (前置詞) に依存すると言える (< *durch die Bekanntschaften laufen*)。 (9) は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケース。

(10) *du hast .. halbgöttlich ernst die Tage durchgelebt* (Goethe) 君は半神のように真剣にその日々を過ごした⁹

⁷ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Goethes_Liebesgedichte_im_Insel_Verlag-027.jpg, 最終アクセス: 2024年2月27日。

⁸ 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』, 第3章からの引用と推定されるので (<https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/meisterl/mstl803.html>, 最終アクセス: 2024年3月11日), 当該文脈に鑑みてこのように訳す。

leben は基本的に自動詞と考えられることから、¹⁰ 4格目的語 die Tage には、元は durch (前置詞) に依存する (< durch die Tage leben) という解釈も成り立つが、ここではしかし die Tage durch leben (leben の結果 die Tage sind durch という状態になる) という結果構文における 4 格目的語であるという解釈もまた成り立つ。したがって (10) は、(8) について述べたのと同様に、(5) の現象の例示とは言い切れない。¹¹

(11) daß er als Prinz Europa **durchgereist** (Gellert) 彼は王子としてヨーロッパを旅して渡った

reisen は自動詞であるから、4 格目的語 Europa は元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch Europa reisen)。(11) は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケース。

(12) Sie **schauen** ja doch sonst die Herzen so **durch** (Schiller) あなたは普段からそんなふう¹²に心を見透かしているではありませんか

当該 durchschauen 「～を見抜く」は、自動詞 schauen から形成されているとも、他動詞 schauen から形成されているとも理論上は考えられる。前者と、すなわち durch die Herzen schauen 「心を通して (非明示の何か、例えば真意を) 見る」に遡ると解釈すると、durchschauen は原則上は非分離動詞ということになる。しかし後者と、すなわち durch etwas die Herzen schauen 「何か (例えば上辺) を通して心を見る」に遡ると解釈すると、durchschauen は原則上も分離動詞ということになる。したがって、(12) は (5) の現象の例示とは言い切れない。¹²

⁹ 『ファウスト』からの引用と推定される。本稿では後で (27) として取り上げる。

¹⁰ 例えば相良 (1978: 889) は、leben に対して同族目的語ではない 4 格目的語を伴う場合 (「暮らす」) を記述している: 「③ (verbringen, erleben) 暮らす: das Volk lebt den Tag mit Spazieren, 民衆は散歩して日を送る: e-e Zeit ~, 時間を空費する。」そのことに鑑みると、die Tage を元は leben に依存すると見なすことも不可能ではないが、こうした用法は多くの辞書で記載がないことから、本稿は、ここでは自動詞の leben が問題であると考ええる。

¹¹ 国松ほか編 (1998: 576) では、durchleben は非分離動詞と記述されている。少なくともその意味では (10) は変則的な例である。

¹² 国松ほか編 (1998: 578) では、当該語義の durchschauen は非分離動詞と記述されている。したがって少なくともその意味では (12) は変則的な例である。

- (13) der sorgenlose T[a]g wird freudig **durchgescherzt** (Haller) 心配事のないその日は愉快に冗談を言いながら過ごされる

scherzen は自動詞であるから、能動文に書き換えた際の4格目的語にあたる der sorgenlose Tag には元は durch (前置詞) に依存する (< durch den sorgenlosen Tag scherzen) という解釈が成り立つ。とはいえ他方で、元は den sorglosen Tag durch küssen (scherzen の結果 der sorgenlose Tag ist durch という状態になる) という結果構文の4格目的語という解釈も成り立つので、(13) は (5) の現象の例示とは言い切れない。

- (14) wie oft hab' ich nach dir die Fluren **durchgestrichen** (Gellert) どれだけ頻繁に君を探して野を歩き回ったことか

関連する語義の streichen は自動詞であることから、4格目的語 die Fluren は元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch die Fluren streichen)。 (14) は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケース。

- (15) Gebirg' und Wälder **durchzustreifen** (Goethe) 山や森をさまよい歩くこと

関連する語義の streifen は自動詞であることから、4格目的語 Gebirge und Wälder は元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch Gebirge und Wälder streifen)。 (15) は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケース。

- (16) nach **durchgewachter** Nacht (Wieland) 寝ずに過ごした夜の後

(16) は Wieland の „Pervonte oder Die Wünsche“ 第3部の「Und, dem Triumph der Sonn' im Aufgang zuzusehen, / Wär's Noth, nach durchgewachter Nacht / Sechs Stunden früher aufzustehen, / Als man vom ersten Schlaf erwacht.」(そして、日の出を眺めるためには、寝ずに過ごした夜の後、第一の睡眠から目覚めるよりも6時間も早く起きることが必要だろう) という部分からの引用と推定される。¹³ 当該文脈及び、wachen は自動詞である

ことを踏まえると、意味関係上当該 durchwachen の4格目的語にあたる Nacht は、元は durch (前置詞) に依存すると解釈できる (< durch (die) Nacht wachen)。とはいえ他方で、元は die Nacht durch wachen (wachen の結果 die Nacht ist durch という状態になる) という結果構文の4格目的語という解釈も成り立つと考えられるので、(16) は (5) の現象の例示とは言い切れない。

- (17) die Unsterblichkeit **wein'** ich froh von der Liebe **durch** (Klopstock)
不死を私は愛への喜びの涙を流して過ごす

(17) は Klopstock の „Petrarca und Laura“ の一節「Singet, Söhne des Lichts, meiner Empfindungen / Unaussprechliche süsse Lust! / Singt sie, ich weine sie nur, ja, die Unsterblichkeit / Wein' ich froh von der Liebe durch!」(歌え、光の息子らよ、私の感覚の言い得ない甘美な喜びを! 歌え、私はそれを泣くだけ、否、不死を私は愛への喜びの涙を流して過ごす) からの引用と推定される。¹⁴ 当該 durchweinen は、DWB (1984: 1711) によれば「eine zeit mit weinen zubringen」(ある時間を泣いて過ごす) という意味であることから、die Unsterblichkeit は「永い時間」という意味に解することができる。¹⁵

weinen は普通は自動詞であることから、4格目的語 die Unsterblichkeit は、元は durch (前置詞) に依存する (< durch die Unsterblichkeit weinen) とも解釈できるが、元は die Unsterblichkeit durch weinen (weinen の結果 die Unsterblichkeit ist durch という状態になる) という結果構文の4格目的語という解釈も成り立つ。したがって (17) は (5) の現象の例示とは言い切れない。

- (18) von tausend **durchgeweinten** Tagen und Nächten (Goethe) 千の泣き

¹³ https://maerchen.arpa-docs.ch/DB/Wieland/HTML/Band_12.html, 最終アクセス: 2024年2月27日。

¹⁴ http://www.zeno.org/Literatur/M/Klopstock,+Friedrich+Gottlieb/Gedichte/Oden.+Erster+Band/Petrarcha+und+Laura#google_vignette, 最終アクセス: 2024年2月29日。

¹⁵ 限界を前提とする durch に支配されていることから、厳密な意味での「永遠」すなわち「無限の時間」が問題というわけではないと考えられる。なお、die Unsterblichkeit が「永い時間」という意味で用いられ得ることについては次の文例を参照されたい: Und tanzen kann ich, jeden Tag, die ganze Unsterblichkeit lang. [そして踊ることだったら私は毎日でも、永遠にでもすることができます](Die Zeit, 17.06.1999, Nr. 25; <https://www.dwds.de/wb/Unsterblichkeit>, 最終アクセス: 2024年2月29日)。

通した日々と夜々について

(18) は Goethe の „Iphigenie auf Tauris“ の一節「Allein die Tränen, die unendlichen, / Der überbliebenen, der verlassenen Frau / Zählt keine Nachwelt, und der Dichter schweigt / Von tausend durchgeweinten Tag' und Nächten, / Wo eine stille Seele den verlorenen, / Rasch abgeschiednen Freund vergebens sich / Zurückzurufen bangt und sich verzehrt.」(しかし残され捨てられた女の無数の涙を、後世の人々は数えないし、それに詩人も、静かな魂が、失われた素速く去った友を呼び戻そうと無駄な憧れを懐き身をやつす、千の泣き通した日々と夜々については口を閉じるのです。)からの引用と推定される。¹⁶ 当該文脈及び weinen は通常自動詞であることに鑑みると、意味関係上 durchweinen の 4 格目的語にあたる Tage und Nächte は、元は durch (前置詞) に依存するとも解釈できるが (< durch Tage und Nächte weinen), 元は Tage und Nächste durch weinen (weinen の結果 Tage und Nächste sind durch という状態になる) という結果構文の 4 格目的語という解釈も成り立つ。したがって (18) は (5) の現象の例示とは言い切れない。

(19) mit ihm die Gassen **durchzuziehen** (Gellert) 彼と共に路地を歩き回る
こと

関連すると考えられるのは「さすらう」という意味の自動詞の ziehen であることから、4 格目的語にあたる die Gassen は、元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch die Gassen ziehen)。(19) は、それにもかかわらず非分離動詞ではなく分離動詞が使われているケース。

以上の考察から、少なくとも (6) (9) (11) (14) (15) (19) の 6 例が実際に (5) の現象の例示、すなわち 4 格目的語が元は durch に依存するにもかかわらず、非分離動詞ではなく分離動詞が用いられる現象の例示であることが確認できた。

また、当該現象の原因とされる「文体的、律動的な要因」の内実についても示唆を得ることができた。第 1 に文体的要因としては、文例の典拠がシラーやゲーテをはじめとする作家の作品であることから、文語ということが意図されている

¹⁶ <https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/iphigeni/aufz05.html>, 最終アクセス: 2024年3月1日。

と考えられる。

第2に律動的要因としては、特定の韻律形成という動機が意図されていると考えられる。例えば、(15)においては Hebung 4つの弱強格 (Jambus) が形成されている (Ge·'birg' und 'Wäl·der durch·zu·'strei·fen) が、この韻律は非分離動詞の durchstreifen を用いると崩れてしまう (例えば Ge·'birg' und 'Wäl·der zu durch·'strei·fen となってしまう)¹⁷。なお、他の複数の例 (とりわけ (11)(14)(19)¹⁸) においても、durch- 非分離動詞を用いると、durch- に強勢がないために、その前または後と弱音節の連続を形成することになるので、それが durch- 分離動詞を選好する要因になっていることが想定できる。

Paul (2002: 237) の以上の検討を踏まえて、本稿は次の2つの問題を提起したい。第1に、「かなり頻繁 (recht häufig)」と言われている、4格目的語が元は durch に依存する (= 非分離動詞が文法的に適切である) にもかかわらず、「文体的、律動的な要因」によって敢えて分離動詞が用いられる現象の頻度は、数値にしてどのくらいかという問題である。第2に、それとある意味で反対に、4格目的語が元は durch に依存しないにもかかわらず、「文体的、律動的な要因」によって敢えて非分離動詞が用いられる場合はないのかという問題である。

- (20) a. 4格目的語が元は durch に依存する (= 非分離動詞が文法的に適切である) にもかかわらず、「文体的、律動的な要因」によって敢えて分離動詞が用いられる現象の頻度は、数値にしてどのくらいか。
- b. 4格目的語が元は durch に依存しないにもかかわらず、「文体的、律動的な要因」によって敢えて非分離動詞が用いられる場合はないのか。

(20a)(20b) という2つの問題を扱うにあたり、本稿は durch- 動詞の文例を、ゲートの『ファウスト』から収集する。というのも、これまでの検討から明らかのように、当該現象は文語かつ律動が重視される場合において生じ易いと考えられるので、代表的な作家の代表的な韻文作品を用いることに意義が認められるか

¹⁷ このように本稿は、Hebung の位置を示すためのアキュートアクセント (アクセント記号) を、ウムラウト表記との兼ね合いにより、音節の上ではなく前に置く (また、そのために音節を中点で区切る)。なお Hebung と、下線で示す語アクセント (Wortakzent) の関係について本稿は、分離・非分離動詞に限って言えば、語アクセントの位置には Hebung も必ず置かれるが、逆に Hebung が置かれるからといって語アクセントがそこにあるとは限らない、という理解である。

¹⁸ 木村千恵氏によると、(9) も、強弱弱格 (Hexameter) と解釈すると (er |'lief die Be·|'kannt·schaf·ten |'durch), 律動のために敢えて分離動詞が用いられているケースということになる。

らである。

3. ゲーテの『ファウスト』における durch- 動詞

今回調査したのは、ハンブルク版ゲーテ全集第3巻所収の „Faust: Eine Tragdögie“ である（以下『ファウスト』）。¹⁹ 『ファウスト』は、全354ページで、12112行の韻文及びト書きを含む少量の散文から成るが、その中に durch- 動詞は、詳しくは以下で見る通り、形容詞的、副詞的に用いられている場合、及び名詞化されている場合を含めて計48トークン／36タイプ確認された。²⁰

以下この全例について考察を行う。その際、本稿の問題意識に応じて、分離動詞か非分離動詞か（3.1「分離動詞」、3.2「非分離動詞」、3.3「分離動詞か非分離動詞か曖昧なケース」と、自動詞（3.1.1.）か他動詞（3.1.2., 3.2.1（,3.3））か再帰動詞（3.2.2）かという2つの観点で分類しながら論じる。なお、引用に際しては、岩波文庫所収の相良守峯訳も合わせて引用する（ただし、難読の漢字表記は適宜簡略化する。また、ルビは省略する）。

3.1. 分離動詞

分離の durch- 動詞の例は14トークン／13タイプ含まれていた。そのうち自動詞が3トークン／2タイプ、他動詞が11トークン／11タイプであった。

3.1.1. 自動詞

3トークンの内訳は、durchdringen「貫き通る」の例が(21)(22)の2件、durchsehen「覗き見る」の例が(23)の1件であった。なお、自動詞の場合は、4格目的語（にあたる項）を伴わないため、本稿が提起した問題とは直接には関わらない。

(21) Oft, wenn es erst durch Jahre **durchgedrungen**, / Erscheint es in vollendeter Gestalt. (71–72行) どうかすると何年も苦しんで考えたあとで [何年もの時を貫き通って (< durchdringen) から], ようやく完成した姿となって現れることもあります。

(22) Er zieht die Glocke, die einen gellenden, **durchdringenden** Ton erschallen läßt, wovon die Hallen erbeben und die Türen aufspringen.

¹⁹ ただし引用と考察の際に、韻律の観点からテキストに疑義が生じ得る場合は、他の版も参照する。

²⁰ 後述の(46)中に生起している sonnendurchstrahlt のように、完全に形容詞化している例はカウントしていない。また、本稿の最後に付す48トークン／36タイプのリストも参照されたい。

(6619行と6620行の間のト書き) 呼鈴の紐を引くと、けたたましい、身内にこたえるような [< durchdringen] 音が鳴り響き、そのため建物が震動し、扉がすべて開く。

(22) に関して述べると、当該 durchdringend が分離動詞 durchdringen の現在分詞であるというのは、Goethe-Wörterbuch²¹ で durchdringend という見出しがある一方 durchdringend は記載がないことに基づく判断である。ゲートは当該の意味で durchdringend (= 非分離動詞 durchdringen の現在分詞) を使うことはなかったのではないかと推察される。

(23) Er läuft zur Kätzin und läßt sie durchsehen. (2418行と2419行の間のト書き) 牝猿に駆けより、透かして視か [< durchsehen] せる [= メフィストが牝猿に (ふるいを通して) 視かせるということ]。

当該 durchsehen は、「(非明示の何かを) 透かして視かせる」という意味に鑑みて、分離動詞 durchsehen (自動詞) と言える。

3.1.2. 他動詞

以下 (20a) の問いを意識しながら11トークン/11タイプを、当該動詞のアルファベット順に引用し考察する。

(24) Bis morgen ist's²² alles durchgebracht, / Es wird uns diesmal wohl gelingen. (7110-7111行) 明日までには全部つかってしまう [< durchbringen 「~を使い果たす」] んですから。今度は多分うまい工合にゆきそうですねです。

bringen は他動詞であることから、意味関係上 durchbringen の4格目的語に

²¹ Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Ver-sion 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D02634>>, 最終アクセス: 2023年11月23日。

²² ベルリン版 (Berliner Ausgabe, Band 8) でも同様に「ist's」となっているが、Deutscher Klassiker Verlag 版 (I. Abteilung: Sämtliche Werke Band 7/I) だと「ists」となっている。しかしいずれにしても、弱強格を保持するためには ist es がふさわしいはずであり (bis 'mor-gen 'ist es 'al-les 'durch-ge-'bracht), 敢えてそれを崩している理由は不明である (bis 'mor-gen 'ist's/'ists 'al-les 'durch-ge-'bracht)。

あたる es は、元々 durch に依存するわけではない (= 当該 durchbringen は、文法・造語論の原則通りの分離動詞、以下同趣旨の指摘は適宜省略)。

- (25) Warum machst du Gemeinschaft mit uns, wenn du sie nicht **durchführen** kannst? (S. 138, Z. 7²³) だが、どこまでも遂げる [< durchführen 「～を貫徹する」] 力がないのに、どうしてこちらと縁を結ぶ気になったんですか。

関連語義の führen は他動詞であることから、durchführen の 4 格目的語 sie は元は durch に依存するわけではない。したがって文法・造語論の原則に鑑みると durchführen は分離動詞と言える。なお、当該箇所は、Ciupke (1994: 89f., 213) によれば「律動のある散文 (Rhythmische Prosa)」(下線は引用者) であり、durchführen が分離動詞であることを強勢に鑑みて裏付けることは残念ながらできない。

- (26) Hier aber ward ein großes Beispiel **durchgekämpft**: / Wie sich Gewalt Gewaltigerem entgegenstellt, / Der Freiheit holder, tausendblumiger Kranz zerreißt, / Der starre Lorbeer sich ums Haupt des Herrschers biegt. (7018-7021行) ここにその大きな例として徹底的な戦が行われました [< durchkämpfen 「～を戦い抜く」]。暴力が、もっと強い暴力に抵抗して戦い、千朶の花を編んだ、自由の優しい花環は破れて、硬ばった月桂樹の葉が、勝者の頭に巻きついた。

kämpfen は同族目的語を伴う以外は自動詞であることが知られている。したがって能動文に書き換えた際の 4 格目的語 ein großes Beispiel には、元は前置詞 durch に依存する (< durch ein großes Beispiel kämpfen) という解釈が可能である。しかし、ein großes Beispiel には他にも ein großes Beispiel durch kämpfen (kämpfen の結果として ein großes Beispiel ist durch という状態になる) という結果構文の 4 格目的語という解釈や、さらには、相良訳に見て取れるように ein großes Beispiel の指示対象は戦 (Kampf) であるから、それが同族目的語に準じるようなかたちで元は kämpfen に依存するという解釈

²³ 「曇れる日・野原 (Trüber Tag・Feld)」は後述するように散文であり、通しの行番号からは除外されたかたちで、通しの行番号における 4398行と4399行の間に置かれている。

も可能である。

このように (26) の durchkämpfen には、原則通り分離動詞として用いられているという解釈が可能である以上、そう解釈する方が、敢えて本来非分離動詞であるにもかかわらず分離動詞として用いられていると解釈するよりも適切と考えられる。

(27) Du hast die Größten dieser Zeit gesehn, / Dem Edelsten in Taten nachgestrebt, / Halbgöttlich ernst die Tage **durchgelebt**. (7360-7362 行) あなたはご自分の時代の最大の英雄たちに接し、最高の人びとの事業に倣ってこれに達せんと努め、半ば神のごとく誠実に世を送ってこられたのだ [durchleben 「(ある期間) を暮らす」]。

すでに引用した (10) と同一の例と推定される。したがって詳しくは (10) に関して述べたことを参照されたい。結論としては、当該 durchleben は、原則通りの分離動詞とも非原則的な分離動詞とも見なし得る。

(28) Schon manches hast du **durchgemacht**, / Nun, so gewinn auch eine Schlacht! (10307-10308行) ずいぶんといろんなことをやってのけた [durchmachen 「～をやり通す」] 君だ、では、一といくさ勝ってもらおう。

machen は他動詞であるから、durchmachen の4格目的語 manches は元は machen に依存すると言える (< manches durch 「終いまで」 machen)。

(29) Manch Brockenstückchen wäre **durchzuproben**, / Doch Heidenriegel find' ich vorgeschoben. (6970-6971行) ブロッケン山でやる芸などには、試して [durchproben 「～をよく試す」] いいものもあるが、異教徒の門戸は、これにたいして鎖されているらしい。

意味関係上 durchproben の4格目的語にあたる manch Brockenstückchen は、元は他動詞の proben 「～を試してみる」に依存すると言える (< manch Brockenstückchen durch 「終いまで」 proben)。

(30) „Wenn du nun alles nach der Ordnung **durchgesehen**, / Dann nimm so manchen Dreifuß, als du nötig glaubst, / Und mancherlei Gefäße,

die der Opfer sich / Zur Hand verlangt, vollziehend heiligen Festgebrauch. (8569-8572行)「さてなにもかも整っているのを見とどけた [durchsehen 「～に目を通す」] ら、神聖な祭典を行うのに、犠牲の係りのものが手もとに必要とするいろいろな容器や、お前がいると思う香炉の類を取りそろえておけ。

durchsehen の 4 格目的語 alles は、元は他動詞 sehen に依存すると言える (< alles durch 「終いまで」 sehen)。

- (31) Ich habe nur begehrt und nur vollbracht / Und abermals gewünscht und so mit Macht / Mein Leben **durchgestürmt**; erst groß und mächtig, / Nun aber geht es weise, geht bedächtig. (11437-11440行) いつも何かを熱望してはそれをやり遂げ、またも望みをかけ、そういうふうに元氣いっぱい生涯をやりとおした [durchstürmen 「～を猛烈な勢いで走り抜ける」]。はじめは威勢よく、いまは賢明に慎重にやっている。

stürmen は「急襲して～を占領する」という意味の他動詞でも使われるが、当該 durchstürmen はむしろ「勢いよく進む」という意味の自動詞の stürmen から形成されていると考えられる。そうすると、durchstürmen の 4 格目的語 mein Leben は、元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch mein Leben stürmen)。他方で、mein Leben が元は mein Leben durch stürmen (stürmen の結果 mein Leben ist durch という状態になる) という結果構文の 4 格目的語であるという解釈は、(31) において発話者がまだ生きている (= 「はじめは威勢よく、いまは賢明に慎重にやっている (Nun aber geht es weise, geht bedächtig.)」) という文脈を鑑みて適切とは言えない。したがって、当該 durchstürmen は本来非分離であるにもかかわらず、分離動詞として用いられているということになる。なお Goethe-Wörterbuch²⁴を見ると、ゲーテは durchstürmen を実際に非分離動詞として用いる場合もあったことが分かる：[Epimeth:] nach durchstürmter durchgenoss'ner Tageslust (Pandra [Ein Festspiel], Apt. I., Bd. 50. S. 295-344; [] は原文のもの)

本来非分離動詞である当該 durchstürmen が取えて分離動詞として用いられてい

²⁴ Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Ver-sion 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D03025>>, 最終アクセス：2023年11月13日。

る原因は、律動にあると考えられる。(31) は, Ciupke (1994: 186) によれば Madrigalvers²⁵, つまり弱強格であり, Hebung は5つと考えられる (Mein Le-ben **‘durch-ge-’stürmt; erst ‘groß und ‘mäch-tig,**). よって, もしここで durchstürmen を使うと韻律が崩れてしまう (例えば Mein Le-ben **durch-’stürmt; erst ‘groß und ‘mäch-tig,**).

- (32) Unsere Schuhe sind **durchgetanzt**, / Wir laufen auf nackten Sohlen.
(4373-4374行) 踊ってくらし靴は底ぬけ [**< durchtanzen** 「(靴底に) 踊って穴をあける」], 裸足でさすらう身のはてだ。

能動文に書き換えた際に durchtanzen の4格目的語にあたる unsere Schuhe は, 元は unsere Schuhe durch tanzen (tanzen の結果 unsere Schuhe sind durch という状態になる) という結果構文の4格目的語と考えられる。なお, unsere Schuhe が元は durch に依存するという解釈 (durch unsere Schuhe tanzen 「私たちの靴を通して踊る」) は意味に鑑みて適切ではないと思われる。

- (33) Vierbespannt ein prächtiger Wagen / Wird durch alles **durchgetragen**;
/ Doch er teilet nicht die Menge, / Nirgend seh’ ich ein Gedränge.
(5510-5513行) 四頭立の立派な竜車が, みんなの中を突切ってやってきます [**< durchtragen** 「(ある場所を通して) ~を運ぶ」]。そのくせ, 群衆を押分ける様子もなく, どこにも混雑を起してはいないようです。

能動文に書き換えた際に durchtragen の4格目的語にあたる ein prächtiger Wagen は, 元は他動詞 tragen に依存すると言える。

- (34) Mir **wühlt** es Mark und Leben **durch**, das Elend dieser Einzigen (S. 138, Z. 2) おれにはこのただ一人の苦しみだけで, 骨髄をえぐられる [**< durchwühlen** 「~中を/~を通して掘り返す」] ような思いがする。

wühlen には, 例えば国松ほか編 (1998: 2718f.) によれば, Loch や Tunnel と

²⁵ 「ゲーテは, 常に Auftakt をもつ Madrigal の詩行を「ファウスト」の中で多く使用しているので, この種のすなわち Jambus をファウスト詩行と呼ぶこともあるのである。ファウスト詩行は原則として4ないし6の Hebung を1詩行中に置き (4-6 Jambus), 自由な組み合わせで押韻するものである。」(一ノ瀬 2018: 101f.)

いった被成物を4格目的語として伴う場合(「掘って～を作る」), seinen Kopf in die Kissen wühlen の seinen Kopf のような移動物を4格目的語として伴う場合(「掘って～を埋める」), それから den Schlüssel aus der Einkaufstasche wühlen の den Schlüssel のような探索対象を4格目的語として伴う場合(「掘り返して～を取り出す」)があるが,(34)の Mark und Leben は, これらいずれのケースとも異なる。したがって,(34)の Mark und Leben は, 元は wühlen に依存するというよりは, durch (前置詞)に依存すると考えられる(< durch Mark und Leben wühlen 「骨髄中を／骨髄を通して掘り返す」)。そうだとすれば, 当該 durchwühlen は本来非分離動詞であるにもかかわらず, 分離動詞として用いられているということになる。なお(64)(65)で取り上げるように, 実際ゲーテは『ファウスト』の653行及び3286行において同種の durchwühlen を非分離動詞として用いている。

既に引用した(25)と同じく, 当該箇所は, Ciupke (1994: 89f., 213)によれば「律動のある散文 (Rhythmische Prosa)」であり, 特定の詩型に完全に当てはまるというわけではない。しかし, それでもなお弱強格は認められるように思われる (Mir ^ˈwühlt es ^ˈMark und ^ˈLeben ^ˈdurch, das ^ˈElend ^ˈdie-^ˈser ^ˈEin-^ˈzi-^ˈgen²⁶;)。そうだとすれば, もしここで durchwühlen を使うと, 韻律が崩れてしまうことになるので (例えば Mir ^ˈdurch-^ˈwühlt es ^ˈMark und ^ˈLeben, das ^ˈElend ^ˈdie-^ˈser ^ˈEin-^ˈzi-^ˈgen;), それが本来非分離動詞である当該 durchwühlen が敢えて分離動詞として用いられている原因として考えられる。

以上, durch- 動詞が分離動詞かつ他動詞として用いられている例11トークン／11タイプを考察した。結果, 文法・造語論の原則に照らすと本来非分離動詞として用いられなければならない例が(31)(34)の2件判明した。

したがって, 本稿が提起した問題のうち(20a)に関しては, すなわち4格目的語(にあたる項)が, 元は durch に依存するにもかかわらず, 分離動詞が用いられるという現象は, 『ファウスト』においては2トークン／2タイプ確認されたということになり, その頻度は, 他動詞かつ非分離動詞が用いられなくてはならない例33トークン(本来非分離動詞が用いられなくてはならないが分離動詞が用いられている先述の2トークン+本来通り非分離動詞(他動詞)が用いられている後述の31トークン)を母数とすると, 約6%ということになる。また,

²⁶ Deutscher Klassiker Verlag 版 (S. 188f.) でも当該箇所は, Mir wühlt es Mark und Leben durch, das Elend dieser einzigen となっており, 韻律上の差異はないことを付記しておく。

当該現象の原因としては律動が考えられることが分かった。

3.2. 非分離動詞

非分離の durch- 動詞は計32トークン／21タイプ含まれていた。そのうち他動詞が31トークン／20タイプ、再帰動詞が1件であった。

3.2.1 他動詞

以下 (20b) の問いを意識しながら31トークン／20タイプを引用しつつ考察するが、簡潔さのために、原則通りの非分離動詞であることが明らかな例の場合、すなわち4格目的語（にあたる項）が元々 durch に依存していることが明らかな例の場合は、それについての言及を割愛する。

(35) So bleibe denn die Sonne mir im Rücken! / Der Wassersturz, das Felsenriff **durchbrausend**, / Ihn schau' ich an mit wachsendem Entzücken. (4715-4717行) 太陽はおれのうしろに留まっておれ。岩の裂目から物凄じくほとばしる [< durchbrausen 「轟音をたてて～を通り抜ける」] 滝を眺めていると次第に心が歡びに踊ってくる。

(36) Hier aber war's! Plutonisch grimmig Feuer, / Äolischer Dünste Knallkraft, ungeheuer, / **Durchbrach** des flachen Bodens alte Kruste, / Daß neu ein Berg sogleich entstehen mußte. (7865-7868行) ところがここじゃ暴力でいったんだ。地獄の王プルートーの猛火や、風の神エーオルスの強烈なガスの爆発力が平地の古い表皮を突き破って [< durchbrechen 「～を押し破って通る」], たちまち新しい山が出来あがらざるをえなかったのだ。

(36) において durchbrechen は、「～を破る」という意味の他動詞 brechen ではなく、前置詞句を伴って「(～を破って／通って) 現れ出てくる」という意味になる自動詞 brechen から形成されていると考えられる。したがって、4格目的語 (des flachen Bodens) alte Kruste は、元は durch (前置詞) に依存していると言える (= 原則通りの非分離動詞、以下同趣旨の指摘は省略: < durch des flachen Bodens alte Kruste brechen)。

(37) Ein Feuerwagen schwebt auf leichten Schwingen / An mich heran! / Ich fühle mich bereit, / Auf neuer Bahn den Äther zu **durchdringen**, /

Zu neuen Spären reiner Tätigkeit. (702-703行) 一輛の火焰の車が軽やかに天翔けて、おれの方へ近づいてくる。おれは新しい道のうえを、大空のエーテルをつき切って [< durchdringen 「～を貫いて通る」], 純粋な活動の新天地へとすすんでゆく心構えができているのを感じる。

- (38) Jetzt zu der Alpe grünesenkten Wiesen / Wird neuer Glanz und Deutlichkeit gespendet, / Und stufenweis herab ist es gelungen; - / Sie tritt hervor! - und leider schon geblendet, / Kehr' ich mich weg, vom Augenschmerz **durchdrungen**. (4699-4703行) いまやアルプスの緑の凹んだ草原に、あたらしい輝きと明るさが恵まれ、それがだんだんと下の方まで届いてきた。- 太陽は現われた! - が、悲しくもおれは眼がくらんで、沁みとおる [< durchdringen 「～を貫いて／～中(じゅう)を通る」] 眼のいたさに、面をそむけねばならぬ。
- (39) Gift und Dolch statt böser Zungen / Misch' ich, schärf' ich dem Verräter; / Liebst du andre, früher, später / Hat Verderben dich **durchdrungen**. (5381-5384) われ裏切者の蔭口きかず、ただ毒を盛り、刃を研がん。あだし女に愛を移さば、いずれ身内に毒ぞめぐらん [< durchdringen 「～中を通る」]。
- (40) Vom frischen Geiste fühl' ich mich **durchdrungen**; (7189行) おれは新鮮な精神が体に沁みわたる [< durchdringen 「～中を通る」] ような気がする。
- (41) So wunderbar bin ich **durchdrungen**! (7274行) あやしい思いが身うちに沁みわたる [< durchdringen 「～中を通る」]。
- (42) Wie ich mich blühend freue, / Vom Schönen, Wahren **durchdrungen** ... (8433-8434行) おれは美と真とに骨髓まで浸りきって [< durchdringen 「～中を通る」], 燃えあがる歓びをおぼえてきたわい。
- (43) Pfeile, **durchdringet** mich, / Lanzen, bezwinget mich, / Keulen, zerschmettert mich, / Blitze, durchwettert mich! (11858-11861行) 征矢よ、われを貫け [< durchdringen 「～を貫いて通る」], 槍よ、われを突き刺せ、棍棒よ、われを打ち砕け、雷火よ、われに落ちかかれ
- (44) Selbst der alte Satansmeister / War von spitzer Pein **durchdrungen**. (11951行) 例の年とった悪魔の親方でさえ、ヒリヒリする痛みに身内を貫かれました [< durchdringen 「～中を通る」]。
- (45) Tönet laut in schärfern Tönen, / Die das breite Meer **durchdröhnen**, / Volk der Tiefe ruft fortan! (8044-8046行) ひろき海原とよもす [<

durchdröhnen 「～中を轟く」ばかり，なおも鋭き音をたてて，海の底なる族を呼べかし。

- (46) Gleich dem fertigen Schmetterling, / Der aus starrem Puppenzwang / Flügel entfaltend behendig schlüpft, / Sonnendurchstrahlten Äther kühn / Und mutwillig **durchflatternd**. (9657-9661行) それは丁度，固い窮屈なさなぎの殻から翼をひろげてすばやく抜け出し，日光の満ちあふれている大気の中を大胆に気ままに舞っていく [< durchflattern 「～を通り抜けて舞う」] 育ちあがった蝶々のようでした。
- (47) Und find' ich hier das Seltsamste beisammen, / **Durchforsch'** ich erst dies Labyrinth der Flammen. (7077-7078行) よしんばどんな奇怪なものが群れていようとも，おれは真剣にこの焰の迷路を捜しまわら [< durchforschen 「～中を調査する」] ずにいない。
- (48) Was sehen wir von weiten / Das Wellenreich **durchgleiten**? (8160-8161行) 遠の方より海原を，滑りきつる [< durchgleiten 「～を通して滑空する」] はなに者ぞ。
- (49) Ich fühle gleich den Boden, wo ich stand; / Wie mich, den Schläfer, frisch ein Geist **durchglühte**, / So steh' ich, ein Antäus an Gemüte. (7074-7076行) おれの立っている土地がそれであることはすぐにわかった。眠っていたおれに新たな精神が燃え立つ [< durchglühen 「～を通して／～中で赤熱する」] やいなや，おれは，大地にふれて力をえたアンテウスのようになった。

(49) の durchglühen は、「～を真っ赤に焼く」という意味の他動詞の glühen から形成されているというよりは、「赤熱する」という意味の自動詞の glühen から形成されていると考えられる。なぜなら，相良訳に鑑みても，また精神は通常肉体の内部に想定されることに鑑みても，「精神」が「私を通して／私の内中で赤熱する (durch mich glühen)」という，4格目的語が durch (前置詞) に依存する構造に遡った方が，精神が「私を終いまで真っ赤に焼く (mich durch (終いまで) glühen)」という，4格目的語が他動詞 glühen に依存する構造に遡るよりも自然に思えるからである。

さらに Ciupke (1994: 114, 217) によれば，この箇所は Hebung が5つある弱強格であるから (Wie 'mich, den 'Schlä'fer, 'frisch ein 'Geist durch-'glüh-te.), 当該 durchglühen は強勢に鑑みても非分離動詞と言える。

- (50) **Durchgrüble** nicht das einzigste Geschick! / Dasein ist Pflicht, und wär's ein Augenblick. (9418-9419行) 二つとないこの運命をあまり難しく考え [< durchgrübeln 「～中を思案する」] なさるな。生存は義務なのです、たとえ束の間であろうとも。

(50) の durchgrübeln は、例えば既出の (47) の durchforschen と類比的に捉えられる。ただし durchforschen においては 4 格目的語 dies Labyrinth 「この迷路」は実際の場所であるが、当該 durchgrübeln の 4 格目的語 das einzigste Geschick 「二つとないこの運命」は、あくまでも比喩的な場所と考えられる。

- (51) Wie Himmelskräfte auf und nieder steigen / Und sich die goldnen Eimer reichen! / Mit segenduftenden Schwingen / Vom Himmel durch die Erde dringen, / Harmonisch all das All **durchklingen!** (449-453行) 天のもろもろの力が昇ったり降ったりして、互いに黄金の桶を渡し合っている。それらは祝福の香も高く羽ばたきしながら、天から降って下界をつらぬき、諧調をなして一切万有の中に響き渡る [< durchklingen 「～を通して／～中を響く」] ではないか。

- (52) O selig der, dem er [= der Tod] im Siegesglanze / Die blut'gen Lorbeern um die Schläfe windet, / Den er, nach rasch **durchrastem** Tanze, / In eines Mädchens Armen findet! (1573-1576行) ああ、勝利の栄光のさなかに、血まみれな月桂冠をいただいて死ぬものは幸いだ。めまぐるしく踊り狂った [< durchrasen 「～の間中荒れ狂う」] あとで、乙女の腕に抱かれたまま死を見出したものは仕合わせだ。

(52) の durchrasen の意味関係上の 4 格目的語にあたるのは、Tanz であると考えられる。というのもここでは、der で指されている幸いとされる人物が、勝利の祝祭において「めまぐるしく踊り狂った」と解するのが自然に思われるからである。そうだとすれば、rasen は自動詞であることから、Tanz が元は durch (前置詞) に依存しているという解釈が成り立つ (< durch einen Tanz rasen)。なお、確かに Tanz が元は einen Tanz durch rasen (rasen した結果 ein Tanz ist durch という状態になる) という結果構文の 4 格目的語であるという解釈も不可能ではないが、(52) において durchrasen は非分離動詞であることから、敢えてそのように解釈するのは適切ではないと思われる。

- (53) Wenn du mich, Herr, **durchschaust**, geschieht mir schon genug.
 (10892行) 私の心をお見抜き [< durchschauen 「～を通して見る, 見抜く」] くだされば, 私は満悦に存じます。

(12) について述べた通り, 「～を見抜く」という意味に鑑みると, 当該 durchschauen は, 他動詞 schauen から形成されているとも, 自動詞 schauen から形成されているとも理論上は考えられる。なお, 前者と, すなわち durch etwas mich schauen 「何か (例えば, 私の上辺) を通して私 (の本性) を見る」に遡ると解釈すると, durchschauen は原則上は分離動詞ということになり, 後者と, すなわち durch mich schauen 「私を通して (非明示の何かを, 例えば私の真意) を見る」に遡ると解釈すると, durchschauen は原則上は非分離動詞ということになる。

他方で強勢に鑑みるならば, 当該 durchschauen は非分離動詞と言える。というのも Ciupke (1994: 166ff., 222) によれば, この箇所は Alexandriner²⁷, つまり Hebung 6つの弱強格だからである (Wenn 'du mich, 'Herr, **durch' schaut, ge'schieht mir 'schon ge'nug**)。

通常の辞書記述において「～を見抜く」という語義の durchschauen は非分離動詞とされていることに鑑みると, (53) の durchschauen が非分離動詞であるのは原則通りであると, すなわち当該 durchschauen は自動詞 schauen から形成されていると見なすのが適切に思える。²⁸

- (54) Wie wird mir! – Hiobsartig, Beul' an Beule / Der ganze Kerl, dem's vor sich selber graut, / Und triumphiert zugleich, wenn er sich ganz **durchschaut**, / Wenn er auf sich und seinen Stamm vertraut; (11809-11812行) おれはどうしたのだーヨブみたいにからだ一面, 火ぶくれだらけで, わが身ながら薄気味悪いが, それでも自分の本性を見究め [< durchschauen 「～を通して見る, 見抜く」], 自分と自分の血筋を信頼すれば, これでも凱歌を奏することができる。

²⁷ Alexandriner とは「6脚の Jambus で成立する詩行で, 第3の Hebung のあとに明確な句切り (Zäsur) が入るものをいう」(一ノ瀬 2018: 40)

²⁸ 既に註5で述べた通り, 非分離動詞ではあるが, 能動文において4格目的語にあたる語が, 元は durch に依存すると見なし難い例も全くないわけではないので, durchschauen にも他動詞 schauen から形成されているという解釈の余地はあるが, そのような解釈を取なくてはならない。

(54) の durchschauen も, (53) の durchschauen について述べたのと同様の根拠により, 原則通りの非分離動詞と考えられる。また, Ciupke (1994: 224) によればこの箇所は Magrigalvers すなわち弱強格であり, Hebung は6つと考えられることから (Und 'tri-um-phiert zu'gleich, wenn 'er sich 'ganz durch'schaut), 韻律に鑑みても, 当該 durchschauen は非分離動詞と言える。

- (55) Die Glocke tönt, die fürchterliche, / **Durchschauert** die berußten Mauern. (6819-6820行) 恐ろしい鈴の音が鳴りひびいて, 煤けた石壁が震動する [< durchschauern 「身震いさせながら~を通る」]。
- (56) Und wie ich diese Feuerchen **durchschweife**, / So find' ich mich doch ganz und gar entfremdet, / Fast alles nackt, nur hie und da behemdet (7080-7082行) この篝火のあたりを一つずつ通ってみる [< durchschweifen 「さまよいながら~を通る」] と, おれはまったくよそ者という感じがしてくる。みんなが裸で, 肌着姿がたまにあるにすぎない。
- (57) Und hättest du den Ozean **durchschwommen**, / So sähst du dort doch Well' auf Well kommen / Selbst wenn es dir vorm Untergange graut. (6239-6241行) けれどもね, よしんばあなたが大海を泳ぎわたり [< durchschwimmen 「泳いで~を渡る」], 渺茫無限の空間に眼を放つとしても, 寄せてくる波の起伏は眺められるでしょう, 溺れ死ぬ怖れは多少あるかもしれないが。
- (58) Wenn, alter Herr, nicht Lethes trübe Fluten / Das schiefgesenkte, kahle Haupt **durchschwommen**, / Seht anerkennend hier den Schüler kommen, / Entwachsen akademischen Ruten. (6721-6724行) これは老先生, 忘却の川レーテの濁った流れが, 俯向いておられるその禿頭を浸していなかったら [< durchschwimmen 「泳いで~を通り抜ける」²⁹], ここに昔の学生が大学の鞭などは疾くに脱けだして, やってきているのを見て思いだしてください。
- (59) Verworfenes Wesen! / Kannst du ihn lesen? / Den nie Entsproßnen, / Unausgesprochenen, / Durch alle Himmel Gegoßnen, Freventlich **Durchstochnen**? (1305-1309行) やくざものめ, これが読めるか。無常の生を受けざりしもの, 言葉に表しがたきもの, 諸天に澎湃と拡がるもの,

²⁹ Goethe-Wörterbuch (digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D02964>>, 最終アクセス: 2024年3月13日) によれば, 当該例は durchschwimmen の比喩的な用例である。

無道にも刺し貫かれ [< durchstechen 「～刺し通す」] したもの。

- (60) Kein Schmuck, der nicht ein liebenswürdig Weib / Verführt, kein Schwert, das nicht den Bund gebrochen, / Nicht etwa hinterrücks den Gegenmann **durchstochen**. (4107-4109) 愛らしい女をたらしこまなかった飾りの品もなく、盟った友を裏切って、相手をうしろから突き刺した [< durchstechen 「～を刺し通す」] ことのない剣もございませんよ。

(59) 及び (60) に関して述べると、当該 durchstechen は、他動詞 stechen に、すなわち etwas durch schechen 「～を終いまで刺す」という構文に遡るとも、自動詞 stechen に、すなわち durch etwas schechen 「～を通して刺す」という構文ないし、etwas durch stechen (stechen した結果 etwas ist durch という結果になる) という結果構文に遡るとも解釈できるが、当該 durchstechen は明らかに非分離動詞として用いられていることから、durch etwas schechen 「～を通して刺す」という構文 (= 原則非分離動詞になる、4格が元は durch に依存する構造) に遡ると解釈するのが、敢えて他の解釈をするよりも適切に思われる。

- (61) Indessen ich ein Stückchen Welt **durchwandre**, / Entdeck' ich wohl das Tüpfchen auf das i. (6993-6994行) 一方、私は世界の一部をめぐり歩いて [< durchwandern 「～を通して／～中を徒歩旅行する」], 画竜に睛を点ずることを心がけましょう。

- (62) Willkommen, süßer Dämmerchein, / Der du dies Heiligtum **durchwebst!** / Ergeif mein Herz, du süße Liebespein, / Die du vom Tau der Hoffnung schmachtend lebst! (2687-2690行) 懐かしいなあ、この聖なる殿堂の中いっばいに、漂っている [< durchweben 「～中を／～を通して編む」] 「～を動き回る」] やさしい黄昏の光は。思い寝れながらも希望の露を吸ってわずかに生きている甘美な恋の悩みよ、おれの心臓をかたく捉えてくれ。

(62) の durchweben に関して述べると、weben は自動詞としても他動詞としても用いられるが、4格目的語の dies Heiligtum 「この聖なる殿堂」は、例えば編むという行為の対象とは考え難いので、元は durch (前置詞) に依存すると言える (< durch dies Heiligtum weben)。また、この箇所は Ciupke (1994: 66, 210) によれば Madrigalvers であり、durchweben が含まれる行は弱強格で Hebung は4つと考えられる (Der 'du dies Hei-lig-tum **durch**-webst!)。

したがって文法・造語論の原則と強勢の両方に鑑みて、当該 *durchweben* は非分離動詞と言える。

- (63) Pfeile, durchdringet mich, / Lanzen, bezwinget mich, / Keulen, zerschmettert mich, / Blitze, **durchwettert** mich! (11858-11861行) 征矢よ、われを貫け、槍よ、われを突き刺せ、棍棒よ、われを打ち碎け、雷火よ、われに落ちかかれ [< *durchwettern* 「(雷が) ~を貫く」]
- (64) Den Göttern gleich' ich nicht! Zu tief ist es gefühlt; / Dem Wurme gleich' ich, der den Staub **durchwühlt**, (652-653行) おれは神々になど似てはおらぬ。それは骨身に徹してわかっている。おれの似ているのは、塵芥の中にもぐりこんでいる [< *durchwühlen* 「~を通して/~中を掘る」] 虫けらだ。

(64) に関しては (34) への考察を参照されたい。結論として当該 *durchwühlen* は自動詞の *wühlen* から形成されていると考えられるので、その4格目的語 *den Staub* は、元は *durch* (前置詞) に依存すると考えられる (< *durch den Staub wühlen*)。また、この箇所は Ciupke (1994: 66, 211) によれば *Madrigalvers* であり、*durchwühlen* が含まれる行は *Hebung* 5つの弱強格と考えられる (*Dem Wurm-e 'gleich' ich, 'der den 'Staub durch- wühlt*)。したがって文法・造語論の原則と強勢の両方に鑑みて、当該 *durchwühlen* は非分離動詞と言える。

- (65) Ein überirdisches Vergnügen! / In Nacht und Tau auf den Gebirgen liegen, / Und Erd' und Himmel wonniglich umfassen, / Zu einer Gottheit sich aufschwellen lassen, / Der Erde Mark mit Ahnungsdrang **durchwühlen**, (3282-3286行) なるほど現世以上の悦楽ですな。夜露にぬれながら山の上に寝て、天と地とをうっとりして搔き抱き、神を気どって大きくふくれあがり、想像の力で大地の髓をも掘りかえし [< *durchwühlen* 「~を通して/~中を掘り返す」],

(65) に関しても (34) への考察を参照されたい。結論として当該 *durchwühlen* は自動詞の *wühlen* から形成されていると考えられるので、その4格目的語 (*der Erde*) *Mark* は、元は *durch* (前置詞) に依存すると考えられる (< *durch (der Erde) Mark wühlen*)。また、この箇所は Ciupke (1994: 66, 211) によれば *Madrigalvers* であり、*durchwühlen* が含まれる行は *Hebung* 5つの弱強格と考

えられる (Der Er-de Mark mit Ah-nungs-drang durch-wüh-len)。したがって当該 durchwühlen も、文法・造語論の原則と強勢の両方に鑑みて、非分離動詞と言える。

以上で durch- 動詞が非分離動詞か他動詞として用いられている31トークン／20タイプを引用し考察した。結果、本来分離動詞であるという例は1例も観察されなかった。

したがって、本稿が提起した問題のうち (20b) に関しては、すなわち4格目の語 (にあたる項) が、元は durch に依存するわけではないにもかかわらず、敢えて非分離動詞が用いられるという現象は、『ファウスト』においては確認できないという答えがひとまず得られたことになる。

3.2.2 再帰動詞

再帰動詞の場合は、本稿が提起した問題 (= (20a)(20b)) とは直接には関わらないが、再帰動詞と判断する根拠を説明する必要があるので、次に当該例を取り上げる。

(66) Als Gott der Herr - Ich weiß auch wohl, warum - / Uns aus der Luft in tiefste Tiefen bannte, / Da, wo zentralisch glühend, um und um, / Ein ewig Feuer flammend sich **durchbrannte**, / Wir fanden uns bei allzugroßer Hellung / In sehr gedrängter, unbequemer Stellung. (10075-10080行) 主なる神が—その訳は私も知ってはいますが、—われわれを空中からこの世のどん底の、まん中の所で永遠の火が灼熱して、精いっぱい燃えさかっている [< sich durchbrennen 「燃え盛る」] 所へ追放したとき、私たちはそこいらがあんまり明るすぎて、ひどく狭苦しい、不自由な様子をしたもんです。

まず、当該 durchbrennen が非分離動詞と考えられることを述べる。brennen は自動詞でも他動詞でも用いられるので、durchbrennen が分離動詞か非分離動詞か文法・造語論の原則に鑑みて判断することはできないが、強勢に鑑みるならば、当該 (sich) durchbrennen は非分離動詞と言える。というのも、この箇所は Ciupke (1994: 159f., 220) によれば Madrigalvers であり、(sich) durchbrennen が含まれる行は弱強格で Hebung は5つと考えられるからである (Ein e-wig Feu-er flam-mend sich durch-brann-te)。

次に、これを再帰動詞 *sich durchbrennen* と見なす根拠を述べる。一般的な辞書記述では（例えば、国松ほか編 1998: 571）、「燃やし尽くす」という他動詞の *durchbrennen* の記述はあっても、再帰動詞 *sich durchbrennen* は記述されていないし、上段落で示したように当該 *sich* には強勢があると考えられるにもかかわらず（66）を再帰動詞 *sich durchbrennen* の生起例と判断する根拠は、その意味にある。意味に鑑みると、（66）を他動詞の再帰用法（「火が自分を燃やし尽くす」）の例と見なすよりも、再帰動詞 *sich durchbrennen*（「燃え盛る（＝激しく燃える）」）という語彙化した表現が実現している例と見なす方が適切に思われる。なお、Goethe-Wörterbuch³⁰ によれば、ゲーテは他動詞では *durchbrennen* の方を用いていることもそのことの傍証になる（*durchbrennen* の用例としては（66）の1例のみ記述されている）。

3.3. 分離動詞か非分離動詞か曖昧なケース（他動詞）

分離動詞とも非分離動詞とも解釈可能（＝曖昧）な例は次の2トークン／2タイプ含まれていた。これらはいずれも他動詞である。

(67) *Mit welcher Freude, welchem Nutzen / Wirst du den Cursum durchschmarutzen!* (2053-2054行) この課程を濡手で粟のよう存分に楽しまれる [< *durchschmarutzen* 「～を居候として存分に味わう」] このとは、どんなに嬉しく、そして有益だかわかりませぬ。

durchschmarutzen は *durchschmarotzen* の異形と考えられるが、各種辞書記述に鑑みると、*schmarotzen* は、「寄食する、居候する」という意味の自動詞と言える。したがって、4格目的語 *den Cursum* は元は *durch*（前置詞）に依存すると解釈できる（< *durch den Cursum schmarotzen*）。しかし他方で、*den Cursum* は元は *den Cursum durch schmarotzen*（*schmarotzen* の結果として *der Cursum ist durch* という状態になる）という結果構文の4格目的語であるという解釈も同様に成り立つ。前者の解釈ならば、*durchschmarutzen* は本来非分離動詞ということになるが、後者の解釈ならば、*durchschmarutzen* は本来分離動詞ということになる。

強勢に鑑みると、当該 *durchschmarutzen* は、分離動詞のようにも見えるが、

³⁰ Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D02616>>, 最終アクセス: 2023年11月15日。

非分離動詞という可能性も否定はできない。この箇所は Ciupke (1994: 55ff., 209) によれば Madrigalvers つまり弱強格であり, Hebung は4つであると, すなわち durchschmarutzen には第1音節にも強勢があると考えられる (Wirst 'du den 'Cur-sum 'durch-schma-'rut-zen!). 実際, このことをおそらく根拠に, Goethe-Wörterbuch³¹ は durchschmarutzen を分離動詞と記述している (記載例文は (67) のみ)。

ただし, 分離動詞と言い切れるかには疑問の余地がある。というのも, 前々段落で述べた通り, 当該 durchschmarutzen には本来は非分離動詞であるという解釈も可能である以上, 本来強勢のない第1音節に, 韻律上敢えて強勢が置かれているだけである可能性も排除できないからである。したがって, 当該 durchschmarutzen は, 分離動詞とも非分離動詞とも解釈可能 (= 曖昧) な例と言う他ない。

- (68) Der Geist der Medizin ist leicht zu fassen; / Ihr **durchstudiert** die groß' und kleine Welt, / Um es am Ende gehn zu lassen, / Wie's Gott gefällt. (2011-2014行) 医学の精神などつかむのは造作もないさ。まず大世界と小世界とを隈なく調べる [< durchstudieren 「～中を隈なく研究する」], それからは, 結局神の思召のまにまに, 成りゆきにまかせておくのだ。

studieren は「大学で勉強する」という意味の自動詞としても用いられるが, 当該 durchstudieren はむしろ他動詞の, 「～を詳しく調べる」という意味の studieren から形成されていると考えられる。そうすると, 4格目的語の die groß' und kleine Welt は, 元は durch ではなく studieren に依存することになるので, 当該 durchstudieren は, 統語的には非分離動詞のように振る舞っているとはいえ,³² 文法・造語論の原則に照らすと本来は分離動詞ということになる。なお, durchstudieren が本来分離動詞であることには, Goethe-Wörterbuch に鑑みて,³³ ゲーテは durchstudieren を「韻律に規定されている」とされるこの

³¹ Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Ver-sion 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D02938>>, 最終アクセス: 2023年11月11日。

³² 例えば Deutscher Klassiker Verlag 版でも, 「Ihr durchstudiert …」と, durchstudieren は非分離で表記されている。2023年11月15日。

³³ Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB?lemid=D03023>>, 最終アクセス: 2023年11月15日。

一箇所以外では分離動詞として用いていると言えることも傍証になる。

とはいえ、(68) の *durchstudieren* が非分離動詞として用いられていると言い切れるというわけではない。(68) は、Ciupke (1994: 55ff., 209) によれば *Madrigalvers* であり、*durchstudieren* が含まれる行は弱強格であり *Hebung* は5つと、つまり *durch-* にも強勢があると考えられるので (*Ihr 'durch-stu-'diert die 'groß' und 'klei-ne 'Welt*)、強勢に鑑みた場合、当該 *durchstudieren* はなお本来通り分離動詞として意識されている可能性があるからである。

したがって当該 *durchstudieren* は、本来分離動詞であるのに非分離動詞のように用いられている例である可能性が高いとはいえ、厳密には分離動詞か非分離動詞か曖昧な例ということになる。

当該 *durchstudieren* が少なくとも統語的には非分離動詞のように用いられている原因としては、これを明確に分離動詞として用いてしまうと、*Ihr stu-'diert die 'groß' und 'klei-ne 'Welt 'durch* となり弱強格も脚韻 (*Welt* と *gefällt*) も崩れてしまうことが挙げられる。³⁴

以上、分離動詞とも非分離動詞とも解釈可能な *durch-* 動詞の例2トークン／2タイプを考察した。結果、少なくとも(68)に関しては、本来分離動詞であるにもかかわらず、非分離動詞として用いられている例(= (20b) のケース)という可能性の高いことが分かった。また、(68)が(20b)のケースだとするならば、当該現象の原因としては、律動とそれから押韻 (*Reim*) が関与していると考えられることが分かった。

4. おわりに：結論と展望

分離・非分離の *durch-* 動詞に関しては、分離可の場合(=不変化詞の場合)と分離不可の場合(=接頭辞動詞の場合)でいかなる内容的な差異があるかという観点で論じられることが多いなか、本稿はこれまであまり注目されてこなかったと言える、両者の選択に律動が及ぼす影響に着目した。

本稿は Paul (2002: 237) の検討を通して次に再掲する (20a)(20b) という2つの問題を提起した。

³⁴ 匿名の査読者から、当該の *Hebung* 5つの弱強格は語順の変更によって維持可能であるから (*Die 'groß' und 'klei-ne 'Welt stu-'diert ihr 'durch*)、ここではむしろ押韻という動機の方が律動上の動機よりも強いのではないかという趣旨の指摘を受けた。確かにそう考えられる。今後の課題ということになるが、Paul (2002: 237) が指摘している律動の影響だけでなく、押韻の影響にも注目したい。

- (20) a. 4格目的語が元は durch に依存する (= 非分離動詞が文法的に適切である) にもかかわらず、「文体的, 律動的な要因」によって敢えて分離動詞が用いられる現象の頻度は, 数値にしてどのくらいか。
- b. 4格目的語が元は durch に依存しないにもかかわらず、「文体的, 律動的な要因」によって敢えて非分離動詞が用いられる場合はないのか。

そして『ファウスト』における durch- 動詞の48トークン/36タイプを調査・考察した結果, (20a) に関しては, 2トークン/2タイプが当該例と判明した。当該現象の頻度は, 他動詞かつ非分離動詞が用いられなくてはならない例33トークン (本来非分離動詞が用いられなくてはならないが分離動詞が用いられている2トークン+本来通り非分離動詞が用いられている31トークン) を母数とすると, 約6%ということになる。また (20b) に関しては, 当該現象と確実に言える例は見つからなかったが, 当該現象である可能性の高い例は, (68) の1件見つかった。また, いずれの現象に関しても律動の影響が想定できることが分かった (なお, 少なくとも (68) に関しては押韻の影響も想定できる)。

今後まずは他の韻文作品で同様の現象が (どの程度) 見られるかを確かめることが必要であるが, その次の課題としては, 散文と見なされているテキストにおいても, 律動の良し悪しが durch- 動詞の分離・非分離に影響を与える場合がないかを調査・考察することが挙げられる。というのも, Paul (2002: 237) は当該現象を, 少なくとも明示的には韻文に限ると記述しているわけではないからである。

文献表

一次文献

Goethe, Johann Wolfgang von (1808/1833): Faust. Eine Tragödie. In: Johann Wolfgang von Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band 3. Dramatische Dichtungen I. Textkritisch durchgesehen und kommentiert von Erich Trunz. München: Deutscher Taschenbuch Verlag (相良守峯訳 (1958): ファウスト, 第一部・第二部, 岩波書店)。

二次文献

一ノ瀬恒夫 (2018): ドイツ詩学入門, 第5版, 大学書林。

国松孝二ほか編 (1998): 独和大辞典, 第2版, 小学館。

相良守峯 (1978): 大独和辞典, 第25版, 博友社。

佐藤宙洋 (2023): 現代ドイツ語における接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合, 東

- 京外国語大学大学院総合国際学研究所, 博士論文, <<https://tufs.repo.nii.ac.jp/record/2000123/files/dt-ko-0359.pdf>> [最終アクセス: 2025年2月10日].
- 成田節 (2003): ドイツ語動詞「前綴り」の分離・非分離をめぐるドイツ語授業での説明原理を求めて－, 語学研究所論集, 第8号, 東京外国語大学語学研究所, 1-19.
- 橋本文夫 (1961): 前つづり *durch* と *um* の分離・非分離について, 橋本文夫 (1980): 橋本文夫記念論文集－ドイツ語と人生, 三修社, 9-30.
- Ciupke, Markus (1994): *Des Geklippers vielerworrerener Töne Rausch. Die metrische Gestaltung in Goethes „Faust“*. Göttingen: Wallstein Verlag.
- Duden (2018): *Standardwörterbuch. Deutsch als Fremdsprache. 3., neu bearbeitete und erweiterte Aufl.* Berlin: Dudenverlag.
- DWB (1984): *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- DWDS: *Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache*. Hrsg. v. d. Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, <<https://www.dwds.de/d/wb-dwdswb>> [Stand: 10.2.2025].
- Eroms, Hans-Werner (1982): *Trennbarkeit und Nichttrennbarkeit bei den deutschen Partikelverben mit DURCH und UM*. In: Ludwig M. Eichinger (Hg.): *Tendenzen verbaler Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache*. Hamburg: Helmut Buske Verlag, 33-50.
- Goethe-Wörterbuch, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/23, <<https://www.woerterbuchnetz.de/GWB>> [Stand: 10.2.2025].
- Henzen, Walter (1947): *Deutsche Wortbildung*. Halle/Saale: Max Niemeyer Verlag.
- Kjellman, Nils (1945): *Die Verbalzusammensetzungen mit »durch«*. Lund: C. W. K. Gleerup.
- Paul, Hermann (2002): *Deutsches Wörterbuch. Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes. 10., überarbeitete und erweiterte Aufl.* von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Šimečková, Alena (1995): *Zur Valenz als Unterscheidungsmerkmal bei den komplexen Verben mit unfesten/festen Formen*. In: Ludwig M. Eichinger / Hans-Werner Eroms (Hgg.): *Dependenz und Valenz*. Hamburg: Helmut

Buske Verlag, 191-199.

Streitberg, Wilhelm (1895): Rezension von Wustmann R: Verba perfectiva, namentlich im Heiland. Ein Beitrag zum Verständnis der germanischen Verbalkomposition. Leipzig Grunow 1894. In: Anzeiger für Indogermanische Sprach- und Altertumskunde. Beiblatt zu den indogermanischen Forschungen. 5. Bd., 1. Heft. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner, 78-83.

『ファウスト』における durch- 動詞48トークン／36タイプのリスト

複数回出現する動詞については () 中に出現回数を示す。

分離動詞 14トークン／13タイプ

- 自動詞 3 トークン／2 タイプ : durchdringen (2) , durchsehen
- 他動詞 11トークン／11タイプ : durchbringen, durchführen, durchkämpfen, durchleben, durchmachen, durchproben, durchsehen, durchstürmen, durchtanzen, durchtragen, durchwühlen

非分離動詞 32トークン／21タイプ

- 他動詞 31トークン／20タイプ : durchbrausen, durchbrechen, durchdringen (8), durchdröhnen, durchflattern, durchforschen, durchgleiten, durchglühen, durchgrübeln, durchklingen, durchrasen, durchschauen (2) , durchschauern, durchschweifen, durchschwimmen (2) , durchstechen (2) , durchwandern, durchweben, durchwettern, durchwühlen (2)
- 再帰動詞 1 トークン／1 タイプ : sich durchbrennen

分離動詞か非分離動詞か曖昧 2 トークン／2 タイプ

- 他動詞 2 トークン／2 タイプ : durchschmarutzen, durchstudieren

研究会便り

■ 研究発表会・総会

『DER KEIM Nr. 46』の研究発表会および総会は、2023年6月21日（水）17時30分より東京外国語大学語学研究所とZoomオンラインミーティングのハイブリッド形式にて開催されました。

<発表題目>

田辺とおる：シュレーカーの創作史、およびオペラ上演の現状からみる《歌う悪魔》の立ち位置」

池田圭佑：„sein + zu hören“における知覚の経験者の解釈について

また、2024年度の研究発表会および総会は、2024年6月20日（木）17時30分より同形式にて開催されました。

<発表題目>

池田裕行：現代ドイツ語「名詞＋名詞」複合語における接合要素の生起分布－第一要素が複合語の場合についてのパイロット調査－

■ サマースクール

2023年8月4日（金）、8月4日（土）、8月7日（月）～8月9日（水）の5日間、大学院博士前期課程在籍者により、ドイツ語サマースクール（1講座）が開催されました。

・ドイツ語中級への足がかり：短編小説を読んでみよう【初級・中級講読】

また、2024年8月5日（月）～8月9日（金）の5日間には全2講座が開催されました。

・ヨーロッパ中世史の入門書を読む【ドイツ語中級講読】

・ドイツ語で戯曲を読んでみよう【ドイツ語初級・中級講読】

■ 博士論文

佐藤宙洋：「現代ドイツ語における接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合」(2023

年 10 月 11 日)

井坂ゆかり：「現代ドイツ語の目的語としての相関詞 es の出現・非出現と動詞の選択制限」(2024 年 3 月 8 日)

■ 研究発表

井坂ゆかり：Das obligatorische vs. fakultative Korrelat davor (第 49 回日本独文学会語学ゼミナール, 2023 年 8 月 30 日, 近畿大学東大阪キャンパス)

——：「相関詞 es の談話上の機能」(日本独文学会秋季研究発表会, 2023 年 10 月 14 日, 京都府立大学下鴨キャンパス)

池田裕行：Wozu (keine) Fugenelemente in N+N-Komposita?: Versuch ihrer Beschreibung unter einem neuen Stammkonzept (第 49 回日本独文学会語学ゼミナール, 2023 年 8 月 30 日, 近畿大学東大阪キャンパス)

沼畑向穂：Am-Progressiv in deutschen Standardvarianten: Eine funktionale Analyse mit besonderer Berücksichtigung seiner Kombination mit den Adverbien noch und schon (第 49 回日本独文学会語学ゼミナール, 2023 年 8 月 30 日, 近畿大学東大阪キャンパス)

東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会会則

2004年5月13日制定

2008年5月26日改定

2015年5月21日改定

2021年6月9日改定

2022年6月15日改定

第一条（名称）

本会の名称は「東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会」とする。

第二条（目的）

本会はドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化に関する広範な研究を行うことを目的とする。

第三条（活動範囲）

本会は次の活動を行う。

- (1) 研究会活動
- (2) 研究会誌『DER KEIM』の発行
- (3) 「ドイツ語サマースクール」の企画・運営・開催
- (4) その他

第四条（会員）

- 1 本会は通常会員と賛助会員から成る。
- 2 通常会員は第三条に挙げた活動を行う。
- 3 賛助会員は本会の趣旨に賛同し本会の活動を賛助する。

第五条（通常会員）

- 1 次のいずれかに該当する者は通常会員の資格を持つ。
 - (1) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究する学生
 - (2) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究した卒業生で入会を希望するもの
 - (3) 東京外国語大学非常勤講師で入会を希望するもの
- 2 通常会員は年2,000円の年会費を支払う。

第六条（賛助会員）

- 1 次のいずれかに該当する者は賛助会員の資格を持つ。
 - (1) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究する専任教員
 - (2) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究した卒業生で本会の活動への賛助の意思のあるもの
 - (3) その他本会の趣旨に賛同し活動への賛助の意思のあるもの
- 2 賛助会員は年一口1,000円の賛助金を一口以上納め、本会の活動を賛助する。

第七条（会費および賛助金の使途）

会費および賛助金は次の目的に使用する。

- (1) 本会の運営
- (2) 本会の研究会誌『DER KEIM』発行
- (3) その他

第八条（運営委員とその任務）

- 1 本会に次の運営委員を設ける。
 - (1) 運営委員長（総会の招集、運営活動の統括）
 - (2) 編集担当（研究会誌『DER KEIM』の編集）
 - (3) 会計担当（会計）
 - (4) 企画担当（研究会活動・サマースクールの企画及び運営）
 - (5) 広報担当（研究会ホームページの管理）
- 2 運営委員は総会で通常会員及び賛助会員から選任する。
- 3 運営委員の任期は一年とする。ただし再任はさまたげない。

第九条（総会）

- 1 総会はこれを本会の最高意思決定機関とする。
- 2 本会の総会は通常総会と臨時総会に区別する。
- 3 通常総会は毎年一回運営委員長が招集する。
- 4 臨時総会は必要に応じて運営委員長が招集する。

第十条（総会の議事）

- 1 総会の議長は原則として運営委員長がつとめる。

2 総会の議事は、出席した会員の過半数をもって議決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十一条（総会の議決事項）

総会では以下の事項を審議し、議決する。

- (1) 本会の運営委員の選任
- (2) 収支決算・予算の承認
- (3) 本会の活動の報告、活動計画の決定および変更
- (4) その他

第十二条（経費）

本会の経費は会費、賛助金及びその他の収入によってまかなう。

第十三条（会計年度）

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日に終わる。

第十四条（会計監査委員と会計報告）

- 1 本会に運営委員とは別に会計監査委員を設ける。
- 2 会計監査委員は総会で通常会員及び賛助会員から選任する。
- 3 運営委員は毎年度決算報告書を作成し、会計監査委員による会計監査を受けた上で通常総会で報告する。

第十五条（細則）

運営委員はこの会則を施行するため、またはこの会則に定めのない事項について必要があるときは、総会の承認を経て細則を定めることができる。

第十六条（本会会則の改廃）

本会則の改定または廃止は総会における出席者の3分の2の賛成によって議決され発効する。

『DER KEIM』バックナンバー一覧

Nr. 1 (1977)

大島衣: 「ダントンの死」におけるロベスピエール像
 江原吉博: 抒情詩人マイアーの魂の遍歴—水と星のモチーフをめぐる—
 吉原高志: ドイツの伝承童謡について

Koichi Sunaga: Betrachtungen zum Possessivpronomen in der deutschen Sprache der Gegenwart
 Kazuhiro Ochi: Notizen zur Literatursoziologie

Nr. 2 (1978)

沢岡藩: 魔的なものの系譜—トーマス・マンの心性—

Hirofumi Mikame: Notizen zur Valenztheorie
 Katsufumi Narita: Koartikulatorische Eigenschaften der VIV- und VnV- Lauffolge im Deutschen

Nr. 3 (1979)

江原吉博: 裁く者と裁かれる者の逆転劇—C. F. マイアーの「女裁判官」—
 恒川元行: 「相対化」する精神—ビューヒナーのことばと時代—

Fumiya Hirataka: Schillers Lied „An die Freude“

Nr. 4 (1980)

岡田公夫: Aktionsart と動詞の分類
 湯浅英男: 現存完了形におけるモドゥスの側面について—トーマス・マンの『魔の山』の例文を用いて—
 井口靖: ドイツ語法副詞の「主観性」と「客観性」

飯沼隆一: 『ファウストゥス博士』試論—語り手の視点—
 山路朝彦: ヘルダーリンにおける „die heilige Nüchternheit“ (「聖なる覚醒」) という概念について

Nr. 5 (1981)

木崎章光: ヴェルンヘルの語りに於ける表現の魅りについて
 沢岡藩: 感覚化した言語—ハントケの「短い手紙」—
 Nobuo Ikeuchi: Bedeutungsanalyse und semantische Valenz —Eine Studie zur semantischen Valenz als Verträglichkeits- bedingung—

井口靖: 「モダリティ」の定義に関する一考察
 森信嘉: 〈意図性〉を表わす言語表現に関して
 堀口里志: 形容詞派生の他動詞の結果性について

Takashi Narita: Zu den Präpositionen, die den Dativ und Akkusativ regieren

Nr. 6 (1982)

堀口里志: 述語的形容詞の用法—den Kaffee schwarz trinken のタイプ—

成田節: 「場所の変化」から「状態の変化」へ—den Wagen mit etwas beladen 型の表現についての考察—

畔上泰治: 連続性の回復を求めて—クライストの「拾い子」をめぐる—

長澤崇雄: 不機嫌な青春—ハインリッヒ・ハイネの『ハールツ紀行』をめぐる—

吉原高志: モモを読む—仲介者としてのモモをめぐる—

Nr. 7 (1983)

Asahiko Yamaji: Zu Hölderlins Bestimmung des Tragischen

Hiroshi Takeuchi: Georg Büchner: „Woyzeck“ —dramatischer Aufbau und Sprache—

長澤崇雄: 「空間」への冒険—ハインリッヒ・ハイネ『フランスの情況』試論—

畔上泰治: 関係としての世界—クライスト「O... 侯爵夫人」研究—

城岡啓二: 意志動詞と無意志動詞の対立

Nr. 8 (1984)

井口英子: 非人称受動の用法

栗山郁雄: beginnen と結びつく動詞

小川暁夫: 起点・到達点表現の非対称性—〈物の移動〉表現における意味構造に関して—
 城岡啓二: lassen と「せる・させる」

田畑義之: 動詞語義の拡大パターンについて

畔上泰治: 物語の意味作用について

飯沼隆一: ホーフマンスタール論初期・I

岩川直子: R. プルトマンの「非神話化」論

長澤崇雄: 掠め取られた「成熟—アルトゥール・シュニッツラーの『ある別れ』について
 竹内宏: 全作品を貫く螺旋—ハンス・E・ノザック論—

Nr. 9 (1985)

野村法: 伝説と昔話

吉原高志: エーミールと探偵たち—都市を読みかえる子供達—

刀禰泰史: 注目の喚起—グリム昔話集における Sage の Erzähltyp を中心に—

竹内 宏: G・ビューヒナー: 『レンツ』試論—自然描写を中心として—

長澤崇雄: 暁には未だ遠い時間—ドイツの犯罪小説をめぐる (1)—

- 畔上泰治：時代と否定—ゲオルク・ハイム論—
 田畑義之：統語的派生による状態変化表現
 太田タカユキ：国語の森の外へ—言語の創造性と翻訳—
 小川暁夫：他動的移動を表わす動詞の前綴化—起点・到達点・両点表現の対照—
 永岡敦：分離前綴 mit- について
 栗山郁雄：文レベルにおける beginnen との共起性に関する一考察
- Nr. 10 (1986)**
 藤縄真由美：「物・事」を主語とする再帰表現についての意味論的一考察
 洞沢伸：「使役」の構造型—geben 型と bringen 型—
 栗山郁雄：動詞の意味タイプと beginnen
 大矢俊明：Modalwort についての一考察
 田畑義之：統語的・意味的環境に条件づけられた語義変容パターンについて
 飯沼隆一：象徴の消点—ホーフマンスタールの『騎兵物語』—
 野村法：昔話と心理学
- Nr. 11 (1987)**
 塩川京子：「追憶」と「予感」—ノヴァーリスの「ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン」〔「青花」〕の構造—
 小西宏明：抒情詩人・若きゲーテの発展
 太田タカユキ：等価の研究
 押野洋：ケラーの『幸運の鍛冶屋』試論—事物描写を中心に—
 志賀邦瑞：昔話 (Märchen) と伝説 (Sage) の心理学
 藤縄真由美：現代ドイツ語における再帰代名詞の機能的分類
- Nr. 12 (1988)**
 伊藤公三：古高ドイツ語の他動詞文における zu 不定詞と原形不定詞—E-tian の用例に基づいて—
 栗山郁雄：移動動詞における「動作性」と「移動性」—beginnen との共起性を手掛かりにして—
 志賀邦瑞：昔話 (Märchen) と心の領域
 押野洋：太ったシュトラピンスキーケラーの「馬子にも衣裳」—
 小西宏明：ゲーテの初期抒情詩における叙景と韻律
- Nr. 13-14 (1990)**
 宮澤義臣：付加語的属格と動詞派生名詞に関する一考察
 田中一嘉：ドイツ語の意志・願望表現について—Aufforderung における wollen と möchte を巡って—
- 鈴木直樹：コブラ性
 一條亮子：酔う観客から問う観客へ—『例外と原則』をめぐる—
 津山拓也：ペレグリーヌスの幸福—『蚤の親方』試論—
 小西宏明：初期抒情詩の自然描写におけるゲーテの視点
 中山由美：南西ドイツの方言学 (研究ノート)
- Nr. 15 (1991)**
 藤縄康弘：同一構文に現れる動詞の意味分配—el/c3/e4 構文を対象に—
 磯村一弘：日本語の五母音が日本人のドイツ語の発音に与える影響—その音響的観察—
 宮澤義臣：Kromayer: Deutsche Grammatica における文法観
 今村理子：グリム昔話集の文体
 本田雅也：物語世界の成り立ち—E.T.A. ホフマンの『砂男』と『黄金の壺』の重なりとずれ—
 小西宏明：「水上の霊の歌」におけるゲーテ的視覚
- Nr. 16 (1992)**
 平野篤司：山口幸輔先生追悼
 林良子：日本人ドイツ語学習者のドイツ語発音の特徴—文中の単語の持続時間とポーズの観察—
 神谷善弘：ドイツ語教育の問題性—非常勤講師の立場から—
 藤縄康弘：Das 文と zu 不定詞句の用法と述語動詞の意味範疇
 今村理子：グリム昔話とアンデルセン童話との比較
 本田雅也：アヴァンギャルド・ホフマン—ロシアにおける E.T.A. ホフマン受容
 小西宏明：「旅人の夜の歌 (第一)」に寄せて
- Nr. 17 (1993)**
 新井瑞穂：劇場としてのオーストリア—『ヘルデンブラッツ』をめぐる—
 一條亮子：ブレヒト『処置』の行き先を
 小西宏明：行為としての詩作—「旅人の夜の歌 (第二)」に寄せて—
 大藪正彦：「動詞行為に伴う属性」表現についての意味論的考察
 神谷善弘：2 年次に何を教えるか—専修大学法文学部における実践例— (研究ノート)
- Nr. 18 (1994)**
 今村理子：アメリカのフェミニズム批評からのグリム童話研究
 西口祐子：グリム兄弟と昔話の「信憑性」—民

- 俗学における語り手に対する態度の変遷から
みて—
- 林 良子：ドイツ語におけるフォーカスの音響音
声学的考察
- 黒田 廉：前綴り ab- の機能に関する考察
Nr. 19 (1995)
- 黒田 廉：前綴の意味機能について
- 徳岡知和子：現実には生きるノヴァーリス—ある
べき人間の姿を求めて—
- 山崎由貴：ヴォルフガング・ボルヒェルト作
『戸口の外で』について
- Masahiko Ozono: Reine Kasus und präpositionale
Kasus—Eine Überlegung zu deren Kodierungsbe-
dingungen—
Nr. 20 (1996)
- 中川亜貴子：『世界審判』に見るカール・クラ
ウスの第一次世界大戦に対する批判的まなざ
し
- 林良子：ドイツ人は日本語のアクセント 語を
どのように聴くか
- 三宅洋子：「視点」と文型の選択—ドイツ語動
詞 drücken を例に—
- 時田伊津子：「物」の 3 格を伴う他動詞文の意
味構造
- 亀ヶ谷昌秀：移動動詞 steigen についての一考
察—マンハイム・コーパスによるコロケー
ション分析—
- 大藪正彦：bekommen 受動をめぐる諸問題
- 工藤 愛：関係文と冠詞の関係についての一考察
- 黒田 廉：移動と分離・非分離前綴 (研究ノート)
Nr. 21 (1997)
- Ryoko Hayashi: Differenzierung der japanischen
und deutschen Vokale durch Formantstrukturen
in männlichen und weiblichen Stimmen
- 西口拓子：グリム『昔話集』における方言による
語り
- 三宅洋子：「物」を主語とし、経験主を対格目
的語として表す他動詞文の意味的考察
Nr. 22 (1998)
- 本田雅也：石の心臓とカウボーイーファンタ
ジー—児童文学とバンノー・ブルードラ『海賊
の心臓』—
- 杉岡幸徳：ゲオルク・トラークル、詩人と麻薬
- 黒田 廉：空間関係を表現する分離・非分離前
つづりおよび前置詞による移動表現について
- 時田伊津子：物の 3 格を伴う他動詞文の意味的
分類
- 妹尾知昭：道具名詞派生動詞に関する考察
- 林 良子：ドイツ語の Fortis/Lenis 閉鎖音の知覚
における母音及び閉鎖区間の持続時間と基本
周波数の意味
Nr. 23 (1999)
- 阿部一哉：凝縮と 4 格化
- 山田寛明：ドイツ語の代名詞 es の用法記述につ
いて
- 横浜正明：ロリオ研究 2—ロリオのユーモア—
- 荻原耕平：リルケ『始源音』についての小論
- 妹尾知昭：ラテン語基本動詞の形態的比率—ド
イツ語基本動詞 1300 との比較— (研究
ノート)
- Nr. 24 (2000)
- 荻原耕平：滅びのなかの永遠—リルケ『オル
フォイスへのソネット』—
- Yuri Komatsubara: Das Bild der Menschen in der
Weimarer Republik
- 時田伊津子：二重目的語構文の実証的分析
- 阿部一哉：現代ドイツ語における er- 動詞—辞
書の語義記述に基づく意味分類— (研究ノ
ート)
- 山田寛明：ドイツ語 Acl 構造のコーパス分析と
その問題提起 (研究ノート)
- Nr. 25 (記念号) (2001)
- 在間進：そうならないように、みんなで頑張り
ましょう。
- 菊池武弘：KEIM25 号にさいして—先輩のお祝
いとお説教と期待のことは
- カン・ミンギョン：ドイツ語「状態変化動詞」
の統語的意味約分析
- 西口祐子：グリムの同時代人、ベヒシュタイ
ナー—その昔話とアイロニー—
- 小松原由理：新しい言葉を求めて—ラウル・
ハウスマンの言語実験—
- Yuki Akino: Das Urheberrechtsproblem bei Choreo-
graphien in Japan: computergestützte Laba-
notation als Lösung
- 西村尚志：虚構と現実—映画の分析を通して
Nr. 26 (2002)
- 久保美由紀：シュテファン・ツヴァイクとヨー
ゼフ・ロートのコスモポリタン性—「オース
トリア」と「ハプスブルク」と「ユダヤ」—
- 阿部一哉：語幹に形容詞を持つ er- 動詞
- Minkyong Kang: Einige Probleme der kausativ-
inchoativen Alternationen bei den Zustands-
veränderungsverben der deutschen Sprache
- Marco Raindl: „Ein Garten/So weise angelegt“: Geschich-
te im Bild von gestalteter Natur in Brechts

„Buckower Elegien“

斎藤理恵：ent-動詞についての考察（研究ノート）

Nr. 27 (2003)

小松原由理：グロテスクな自己演出—ジョージ・グロスの風刺世界とタダの身振り—

吉田耕太郎：首都と地方都市の誕生—地図と旅行記から確認する18世紀ドイツ空間表象について—

カン・ミンギョン：言語運用にみるドイツ語「状態変化動詞」の自他（研究ノート）

Nr. 28 (2004)

吉田耕太郎：文学的営為と道徳—C・F・ゲラーの演劇論・文学論の分析から—

原真理：カフカとイデッシュ

寺田葉子：記憶の場所／建築—ベルリン・ユダヤ博物館をめぐって—

浜津大輔：ドイツ語における3格の用法の実態調査—吉本ばなな『アムリタ』のドイツ語訳(“Amrita”)を題材として(研究ノート)—

Nr. 29 (2005)

加藤由実子：ドイツ語を母語とする日本語学習者の文章における「視点」の傾向—授受動詞・移動動詞について—

阿部一哉：言語運用に基づくドイツ語研究の試み

田原奈穂子：現実と表象の間の劇場空間—ベルリン・フォルクスビューネにおける『白痴』（ドストエフスキー作、フランク・カストルフ脚色・演出）の上演とその舞台としての『ノイ・シュタット』（ペルト・ノイマン設計）—

吉田耕太郎：啓蒙の文学論—エンゲル『ハンドルク論』(1774)の射程とその文学的コンテクスト—

Nr. 30 (2006)

杉山香織：ケストナーの児童文学観—民衆本『オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』の語り直し—

大塚ちはや：ロゴ入りTシャツの挑発—クリスティアン・クラハト『ファーマーラント』にみるドイツのポップ文学—

吉田耕太郎：文化の地勢を旅行する—『クアラント女性の手紙』におこまれた文化的差異とジェンダー—

板橋祐己：歴史的絶対者の可能性—ユルゲン・ハーバマスの『絶対者と歴史』における『世界時代』構想の射程—

須田佳寿子：ドイツ語動作受動文のコーパスに

基づく使用頻度分析（研究ノート）

Nr. 31 (2007)

モハンマド・ファトヒー：名詞付加語のzu不定詞句について

山本裕子：言語・語り手・生—エルフリーデ・イエリネクの語りもの—

Vincenzo Spagnolo: Ad-hoc-Wortbildung — am Beispiel der Zeitkolumnen von Tita von Hardenberg —

Nr. 32 (2008)

大塚ちはや：「私」が語る文学—ドイツ「ポップ文学」の語りのあり方—

小畑友佳：クリエムヒルトとブリュンヒルト—なぜ『ニーベルンゲンの歌』のヒロインはクリエムヒルトなのか—

仲間絢：バンベルク大聖堂の聖母像とその表現様式の発展

高橋美穂：ドイツ語移動動詞における完了の助動詞の選択—bummeln, fliegen, rudern, schwimmen, segelnを対象としたコーパスに基づく頻度分析

信國萌：ドイツ語形容詞における副詞の用法の分類

モハンマド・ファトヒー：名詞を修飾する分詞について

Nr. 33 (2009)

平野篤司：晩年スタイル—アドルフをめぐって—

山口裕之：ベンヤミンはハイパーテキストの夢を見るか。あるいは、ハイパーテキストの触覚性

西口拓子：ロッテ・ライニガーの影絵アニメーションとメルヘンの世界

吉田耕太郎：踊る身体—身体と動作のひとつの概念史として

秋野有紀：「万人に文化を」とミュージアム政策。フランクフルト・アム・マイン市における1970年代初頭の政策を例に

杉山香織：ケストナー『エーミールと探偵たち』の昭和初期日本における受容

山本裕子：『ウルリーケ・マリア・シュトゥアルト』の二つの上演。「ドイツ赤軍派」をめぐる記憶と表象

Mohamed Fathy: Zur Konkurrenz von zu-Infinitivkonstruktionen und dass-Sätzen (研究ノート)

大塚ちはや：ドイツの90年代ポップ文学は終わったか？(研究ノート)

Nr. 34 (2010)

秋野有紀：文化政策的な視点からのクトゥー

ア・フェアミットルンクへの一考察—ドイツは芸術文化政策の公共性をいかに理論化しているのか

桑山佳子：翻訳文学における女ことば 翻訳規範の視点からの考察

杉山香織：ケストナー『エーメールと探偵たち』の現代日本における翻訳

Nr. 35 (2011)

在間進：ドイツ語研究に関する三つの考察—内容認性、規則化、使用頻度—

田中雅敏：定動詞後置を伴わないドイツ語の副文にみる定動詞位置の動機づけ

田嶋諒一：スイスにおける多言語の状況。4つの国語とドイツ語ダイグロシア（研究ノート）

油尾昌輝：チェコ語・ドイツ語の語法の助動詞の比較（研究ノート）

Nr. 36 (2012)

秋野有紀：創造過程への支援という視点から見た劇場政策の課題。ドイツにおける劇場の統廃合と超域的な支援手法の登場は何を意味するのか

小林大志：「条件的」に解釈される名詞句の冠詞選択について

桑山佳子：多和田葉子のテキストにおける文字、『ボルドーの義兄』『飛魂』を中心に（研究ノート）

高橋美穂：移動動詞の使役化について（研究ノート）

Nr. 37 (2013)

村瀬民子：ハイナー・ミュラーの創作における翻訳の可能性—シェイクスピア『お気に召すまま』翻訳をめぐる—

阿部一哉：動詞＋名詞コロケーション分析に基づく句例抽出手法

小林大志：語幹派生名詞と項の実現—動詞対格項を属格で実現できない派生名詞について—（研究ノート）

Nr. 38 (2014)

在間進：ドイツ語研究の新たな構想—個別言語研究の実用的応用—

佐藤宙洋：interessieren – interessiert – Interesseの語法—前置詞の意味を手がかりに—

井坂ゆかり：形容詞述語の意味構造と相関詞esの出現の義務性・任意性—事実性の観点から—

木村千恵：消去のシステムとしての饒舌性—ローベルト・ヴァルザーの『散歩』について—

成田吉重：ドイツ語心態詞について—情報の共

有の視点から—

Nr. 39 (2015)

田辺とおる：フランツ・シュレーカーのオペラ《烙印を押された人々》における欲望のかたち

永盛鷹司：物語の共有—ラフィク・シャミの『夜の語り部』について—

Nr. 40 (2016)

高橋美穂：移動を表す不変化詞動詞と経路項との共起について—fahrenの不変化詞動詞を対象に—

田辺とおる：フランツ・シュレーカーのオペラ《烙印を押された者たち》にみるシェーンベルクの余韻—《幸福な手》との関係において—

木村千恵：創作活動／盗賊稼業—ローベルト・ヴァルザー『盗賊』における断片からの創造—

永盛鷹司：伝達の形式としての「真実」と「物語」—ラフィク・シャミ『夜の語り部』の「語り」—

Nr. 41 (2017)

佐藤宙洋：接頭辞be-の類推促進機能：bemerkenを例に

田辺とおる：オペラを書く、というオペラーシュレーカーの自伝的出世作《遙かなる響き》—

Nr. 42 (2018)

高橋美穂：移動を表す不変化詞動詞における起點・着点の表出—ausfahren, einfahrenを例に—

小林大志：ドイツ語における名詞化複合語の項の解釈について—一項の意味論的階層関係と階層外項—

佐藤宙洋：同幹類義動詞の研究：merk-とその派生語の場合

永盛鷹司：哲学の挫折の物語：フィリップ・マインレンダーの『ルバルティーネ・デル・フィーノ』の新たな位置づけ（研究ノート）

Nr. 42-43 (2019-2020)

佐藤宙洋：競合と対立現代—ドイツ語のblühenとその派生動詞における意味分化—

小林大志：ドイツ語の不定詞名詞化における項の義務性・非義務性—非明示的な項の解釈について—（研究ノート）

木村千恵：書評：新本史著『微笑む言葉、舞い落ちる散文—ローベルト・ヴァルザー論』鳥影社、2020年（書評）

Nr. 45 (2021)

小林大志：名詞化の項実現の形態論的・語彙意味論的条件—コーパスに基づく経験的調査研究—

- 中橋京香：グスタフ・クリムトが描く女性像の変容—《ユーディットI》の解釈をめぐって—
木村千恵：創作技法としての「盗作」と「捏造」—ローベルト・ヴァルザーの「盗み」の意識—

Nr. 46 (成田先生退官記念号) (2022)

- 田辺とおる：二作目の自伝的オペラ《クリストフォロス、あるいは「あるオペラの幻影」》「芸術の黄昏」の時代におけるシュレーカーの試み
沼畑向穂：現代ドイツ語「am 進行形 (am + V-Infinitiv + sein)」の機能に関する考察—語彙的アспектとの関わりから—
池田裕行：名詞複合語における接合要素の再定義—名詞語幹と接合要素の関係を手がかりに—(研究ノート)

※バックナンバーをご希望の場合は、当研究会までご一報下さい。

DER KEIM Nr. 47-48 執筆者

関東学院大学名誉教授

吉原 高志／よしはら たかし

東京外国語大学教授

藤縄 康弘／ふじなわ やすひろ

上智大学文学部教授

小松原 由理／こまつばら ゆり

東京外国語大学大学院特別研究員（ドイツ語圏文学）

木村 千恵／きむら ちえ

東京外国語大学大学院特別研究員（ドイツ語学）

佐藤 宙洋／さとう たかひろ

DER KEIM Nr. 47-48 査読担当者

成田 節（東京外国語大学教授） 西岡 あかね（東京外国語大学准教授）

藤縄 康弘（東京外国語大学教授） 山口 裕之（東京外国語大学教授）

《敬称略・50音順》

DER KEIM Nr. 49 原稿募集

次の要領で DER KEIM Nr.49の原稿を募集します。

- 原稿分量：和文 A4（38字×34行）21枚以内
 欧文 上記相当で720行以内
 （いずれの場合も欧文 200 語程度の抄録をつける。）
- 申し込み締切り：2025年7月18日（金）
- 原稿締切り：2025年10月24日（金）
- 申し込み先：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学ドイツ語専攻気付
 東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会
 E-mail：derkeim@tufs.ac.jp

投稿を希望する方は、論文や研究ノート等の題目とその概略を和文または欧文 A4一枚程度に記載し、氏名、住所、電話番号（メールアドレス）を明記の上、メールにファイルを添付して上記アドレスまでご送信ください。執筆要項は執筆をお願いする段階で編集委員からお送りいたします。「論文」「研究ノート」等の最終的な採否は編集委員会で決定します。

編集後記

DER KEIM 第47-48号は、野村泫先生、在間進先生ならびに谷川道子先生の追悼号として企画されました。長年にわたり本研究会および本誌の発展に多大なる貢献をされた三人の先生方のご逝去を悼み、謹んで哀悼の意を表します。

諸般の事情により発行が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。多くの方々のご協力により、このたび無事に刊行の運びとなりましたことに心より感謝申し上げます。

本号には、野村泫先生を偲ぶ追悼文を吉原高志先生に、在間進先生を偲ぶ追悼文を藤縄康弘先生に、谷川道子先生を偲ぶ追悼文を小松原由理先生にお寄せいただきました。また、ドイツ語圏文学に関する論文1編、ドイツ語学に関する論文1編を掲載しております。執筆者の皆様、ならびに貴重なご指導とご助言を賜りました査読者の先生方に厚く御礼申し上げます。

編集・校正にあたっては、有限会社ノースアイランドの方々にも多大なるご尽力をいただきました。本号の発行に携わったすべての方々にも深謝いたします。

野村先生、在間先生ならびに谷川先生の学恩を偲びつつ、本誌がドイツ語学・文学研究のさらなる発展に寄与できるよう、編集委員一同、一層の努力を重ねてまいります。本誌がより多くの方々の目に触れ、ドイツ語学・文学への興味を喚起する一助となれば幸いです。皆様からの忌憚のないご意見やご感想は、本誌の更なる充実に向けて大変貴重なものとなります。今後とも温かいご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

DER KEIM Nr. 47-48 編集委員
沼畑向穂（博士後期課程）
中橋京香（博士前期課程）
田中真悠（博士前期課程）
連絡先：derkeim@tufs.ac.jp

DER KEIM Nr. 47-48

(野村滋先生・在間進先生・谷川道子先生追悼記念号)

発行日 2025年3月31日
編集発行 東京外国語大学大学院
ドイツ語文学研究会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学 ドイツ語専攻気付
電話番号 (042) 330-5223
振込口座 東京都府中市紅葉丘郵便局
口座番号 00170-2-48229
制作 有限会社ノースアイランド
印刷・製本 有限会社ノースアイランド